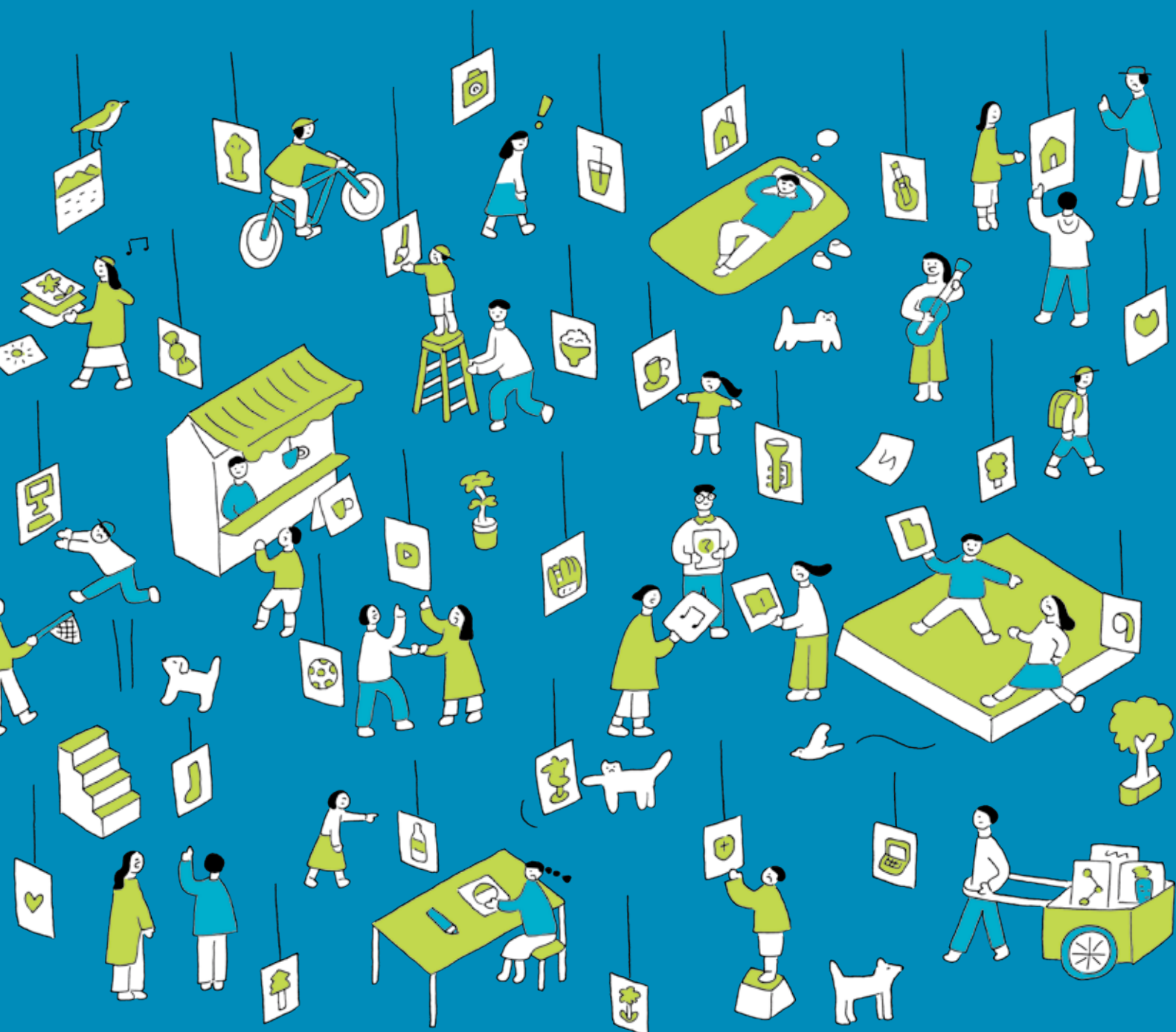




P1

はじめに

P2

子どもプロジェクトアーカイブ

P4

事例集をご覧になる皆様へ

P6

Case 1

子ども食堂

子どもたちの「助けて！」という声に寄り添って

P10

Case 2

就労支援

ボランティア体験の場には、心配して、見守ってくれる人がいた
僕は少し頑張れるようになった

P14

Case 3

居場所

思春期の「うつ」
「うつ」は大人だけじゃない！
元気な自分を取り戻すサポート

P18

Case 4

学習支援

先生が見守ってくれたから、自分のルーツに自信を持ち、
未来に夢が持てるようになった

P22

Case 5

子ども食堂

生きるチカラを育む子ども食堂！
自信を持って歩みだす親子

P26

Case 6

学童保育

「自分の気持ちを伝える」「人と気持ちを共有する」
生活の場(学童保育)がそれを育む

P30

Case 7

子ども食堂

子ども・若者を支える意識の共感と
連帯性が子どもと地域を育む

P34

Case 8

就労支援

10年のひきこもりからの社会へ
働くことは生きること 職場は成長の場

P38

Case 9

プレーパーク

地域の自然と人、そしてプレーパークが僕を育ててくれた

P42

Case 10

子ども食堂

コロナ禍、地元学生と子ども食堂のマッチングで、まちを元気に！

P46

総 括

はじめに

2020年5月「子ども・若者の育ちと自立を支える活動についての調査報告書」を2年間の調査期間を経てまとめました。

この調査によって、子ども・若者の多様な危機に気づき支えようとする住民を主体とする活動団体の姿が明らかになりました。

2020年10月、私たちは、次のステップとして、危機に直面する子ども・若者自身に視点を置き、住民による支援によって、育ちと自立に、どのような影響がもたらされているのかを明らかにする事例集を制作することとしました。

制作期間は、新型コロナウイルス感染症拡大の真只中で、多くの支援活動が、活動休止を余儀なくされていました。しかしながら、「こんな時だからこそ、活動をストップするわけにはいかない」と考える支援団体、支援者たちがいました。

彼らは、もはや「生きづらさ」を感じているだろう複合的な課題を継続的に抱える子ども・若者や、コロナ禍、更に深刻な経済状況や孤立等の危機に直面する家族を知っています。

全ての人々に襲いかかる感染症拡大という未曾有の危機の時代にあっても、地域社会に共に生きる一人として、一団体として、地域に目を向け、新しい発想で、ネットワークを広げ、活動を進めています。

私たちは、特別な想いを持って、本事例集制作に着手し、児童福祉やソーシャルワークの研究者・実践者の方々の協力を得て、この度の発行にたどり着くことができました。

本事例集は、個人情報保護のため、ケースの主体である子ども・若者はもちろん、その家族も、また、支援団体や支援者も個人名を伏せています。

優れた、活き生きとした支援活動が沢山あるのですが写真を掲載することもできません。

しかし、是非、想像して頂きたいのです。子どもや若者が、苦悩から少しずつ解き放たれ、こぼれる微笑みを。自信をつけ輝く笑顔を。子どもの声に耳を澄まし、心の距離を縮め、その笑顔に勇気をもらう支援者の姿を。

子ども・若者の健やかな成長と自立を願って、また、それを実現する豊かな地域づくりを目指して、本事例集をお届けします。

特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター

2021年9月

健やかな子どもの成長、若者の自立を支え合う地域づくりのために

近年、変化し続ける社会情勢、経済状況、家庭、学校などの子ども・若者を取り巻く環境には、さまざまな課題が生じています。それは多様であり複合的です。そんな中、「生きづらさ」を抱えて、健やかな成長や、将来の希望を見出せない子ども・若者がいます。

「子どもと家族の地域生活支援プロジェクト」は、今日見過ごすことのできない、子ども・若者の育ちや自立に関わる課題に向き合い、法人のビジョンでもある「身近な暮らしの中で一人ひとりがしあわせを感じ、共に生きる社会」を目指し、「対話」×「創意工夫」×「行動」を指針として取り組みを続けています。



Stance

「対話」×「創意工夫」×「行動」

- 1 今を知るために調査・研究に取り組みます。
- 2 丁寧に信頼関係を築き、質の高いネットワーキングを構築します。
- 3 多様な地域の特徴を知り、客観的な分析と提案をします。
- 4 観察力を持ち、企画・行動へのプロセスを実践します。
- 5 真の対話を怠らず、創意工夫から新しい方策を模索し続けます。

横浜市子どもの居場所づくりフォーラム
(新型コロナ感染症拡大のため中止) 協 交流会



相談
・
現状把握

コロナ禍での活動団体への中間支援・相談事業
(赤い羽根 子どもと家族の緊急支援活動助成金活用)

2020

2021

2022

発見

個別課題の
分析・検討



「地域のみんなが元気になる活動事例集」の発行9月末
地域の活動団体が課題を発見した、個別のケース課題と支援を可視化
(神奈川子ども未来ファンド助成事業)

自 BOOK



活動の
ネットワーク
づくり

活動団体のネットワークづくり・フォーラム開催 10/10 自 交流会
(かながわ生き生き市民基金助成会基金助成)

子ども・若者を
支える
人材育成

活動団体の人材育成事業 (予定)
(共同募金会 NHK 歳末助け合い配分活用)



子ども・若者の育ちと自立を阻む、多様性・複雑化する課題
子ども・若者を見守り、育む家族や地域の課題
生活に身近な場での伴走型支援の必要性
多様な主体の連携協働の必要性

子ども・若者の
生きづらさ

事例集制作の目的

①育ちと自立に課題を抱える子ども・若者の共有

- ・当事者（子ども・若者）が抱える課題の多様性・複雑性
- ・生活環境（家族・地域・多様な社会資源）から当事者が受ける影響

②子ども・若者の育ちや自立を多様にエンパワする活動の共有

- ・当事者（子ども・若者）の生活の近くで伴走的に行われる支援
- ・当事者（子ども・若者）の多様で複雑な課題を改善する支援

③地域の支援活動による子ども・若者の変化の共有

- ・本人のつぶやきによる変化
- ・支援者の視点による変化

④子ども・若者の課題や、支援の必要性について客観的視点の共有

- ・子ども・若者が抱える課題の社会的視点
- ・支援活動の正当性や必要性についての視点

子ども・若者の育ち
や自立に関する関心
の高まり

子ども・若者を見守り・
支える支援活動
の広がり

子ども・若者支援
ネットワーク体制の
向上

掲載ケースの選定とヒアリングの方法

Step1

事例集に取り上げる子ども・若者の課題と成長段階別の選定

Step2

2020年「子ども・若者の育ちと自立を支える活動についての調査」協力団体より、
課題別、成長段階別の支援ケースを持つだろう団体を選定

Step3

選定団体に、対応するケースの有無、ヒアリング協力について打診

Step4

ケースを最終的に10ケースに絞り、ヒアリングを行い、執筆活動へ

事例の表し方と見方について

課題アイコン

事例の子ども・若者が抱える課題がはじめにわかるように、
アイコンは10種類で表記しています。



ケースナンバーと活動種別

Caseは1～10まで。その下には、どのような活動団体が
支援しているかが示されています。

活動種別は、①こども食堂 ②学習支援 ③居場所
④プレーパーク ⑤学童保育 ⑥就労支援のいずれかです。

Case 1

子ども食堂

Case 4

学習支援

Case 8

就労支援

事業所プロフィールと個人情報について

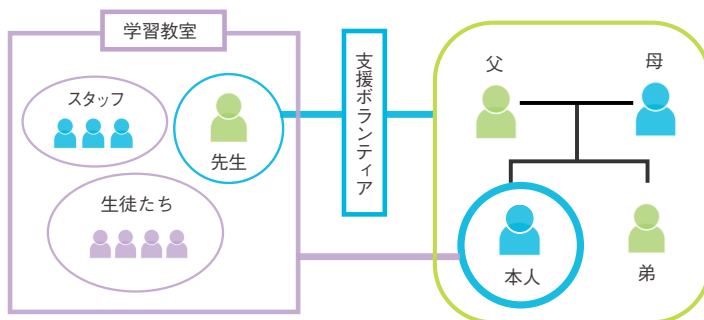
本事例集は、子ども・若者、当事者にフォーカスしているため、個人が特定されない配慮をし、文中の子ども・若者の名前については仮名で、支援者に関しては、イニシャル表記にしています。また、支援活動名についても、個人情報保護の観点から、本事例集では明記しないこととして、事業所の概要のみ掲載しています。

前文&ヒアリングを終えて

前文については、よこはま地域福祉研究センターが、課題を抱える各事例の社会背景、制度政策、今日の社会的課題などを限られたスペースですが情報を示しています。ヒアリングを終えてについては、取材担当者が、ケース、また、支援者、支援団体を総体的に観ての感想を載せています。ケースを超えて、地域力向上や共生社会を意識したコメントもあります。

ジェノグラム&エコマップ

本事例集では、紹介するケースの生活環境を明らかにするために、家族関係だけではなく、地域社会との関係性も表すことにしました。注意してご覧いただきたいのは、社会関係の広がり。支援前の社会関係は紫の枠、支援によって広がった社会関係は青の枠で表しています。



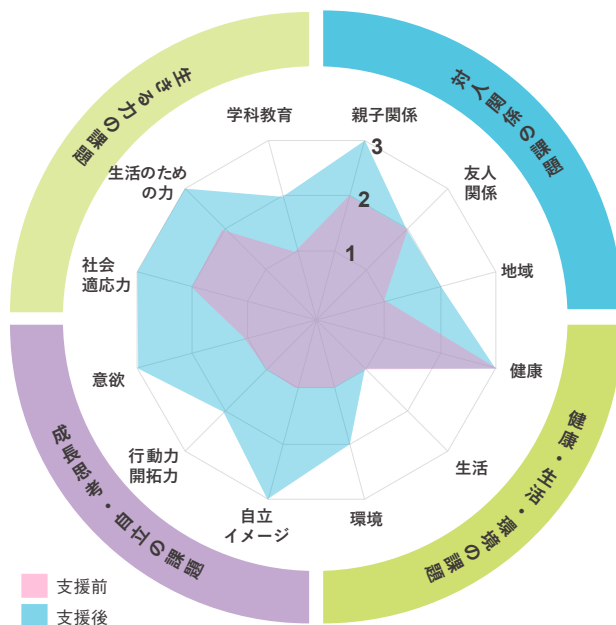
支援のプロセス

事例によって、異なりますが、どの事例も、当事者との関係の構築からはじめ、ケース課題を明確にしなが、伴走的な関係を継続しています。本人に直接支援するものもありますが、本人を取り巻く環境に視点を置いた支援、本人に生活経験の機会や関係する人の広がりを創るなど、間接的な支援も多くなっています。

支援による変化＝レーダーチャート

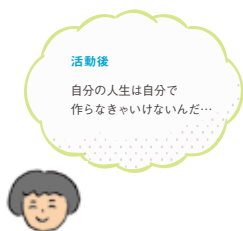
本事例集を制作するにあたり、よこはま地域福祉研究センターで、作成したチャートです。2020年「子ども・若者の育ちと自立を支える活動についての調査」の分析で、子ども若者の課題は、大きく4領域（対人関係の課題、健康生活環境の課題、成長思考・自立への課題、生きる力の課題）があり、それぞれ、更に具体的に、3領域ずつ、異なる課題が発生していると考えました。

そこで、大きく4領域、更に12領域を、支援前と支援後、どのように変化したと観るか、支援者に聴き、チャートに示しています。支援前が赤、支援後は青です。課題は、円の外側に向かうほど改善されていると観ます。このチャートのポイントについては、支援者とのヒアリングの中で感じ取った変化であり、本事例集で取り上げた10事例における相対的評価ポイントではありません。



つぶやき

事例集当事者の変化について、本人のつぶやきの、特に印象的なものを支援者に聴き、表しています。



コラム

各事例にあわせて、関係する研究・関係する取り組みなどをされている第三者にコメントを頂きました。それぞれ、客観的な視点を持った感想、また、共感や、活動に対するエールなど、多様なコメントを頂いています。

Case 1

子ども食堂

子どもたちの「助けて！」
という声に寄り添って

事業所のプロフィール

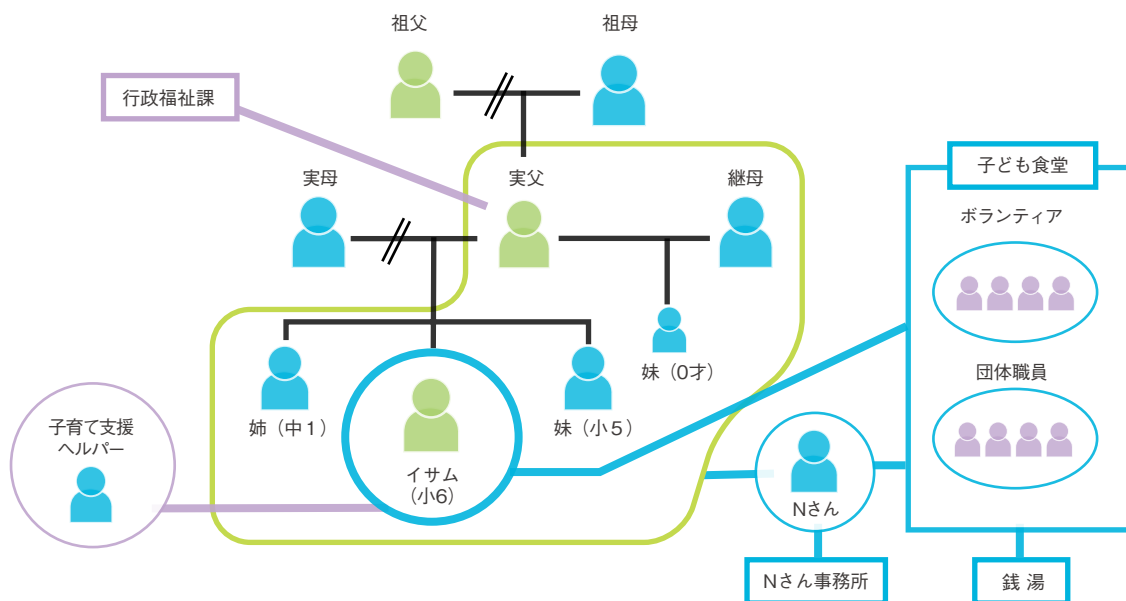
活動種別	子ども食堂・銭湯へ同行・食料支援
活動地域	大和市
活動開始年	2016年～
活動場所	法人施設（2か所）、銭湯
活動日	各会場で月1回
参加者数（平均）	食堂は30～90人、銭湯は8～9人
参加費	子ども無料／大人200円
主なネットワーク	社協、フードバンク、商店、行政

今日、児童虐待が特殊な家族環境での問題ではなく、社会的な問題として関心を向けられるようになってきました。2019年度子どもが親などから虐待を受けたとして児童相談所が対応した件数は、全国で19万件を超えました。虐待の内容別にみると、最も多かったのは暴言を吐いたり、子どもの目の前で家族に暴力をふるったりする「心理的虐待」で10万件（56%）、次いで、殴るなどの暴行を加える「身体的虐待」で4万件（25%）、子どもの面倒を見ない「ネグレクト」が3万件（17%）「性的虐待」2千件（1.1%）となっています。

虐待者の多くは実父母であり、子育て不安や親としての未成熟や精神的な問題がもたらしたものが多いと言われ、地域の社会資源による子育て支援は、親子のWell-being（健康で安心なこと、満足できる生活状態、福祉、幸福）だけでなく、虐待の予防と早期発見のためにも重要と言われています。

本事例は、行政より子育て家族への家事支援の委託を受け活動をしつつ、制度で支え切れない子ども達に安心できる場を提供しようと子ども食堂を行っている団体のNさんが、出会った父子家庭についてです。

PROFILE



イサム君（仮名・小6）は姉（中1）妹（小5）との3人兄弟、母親は子どもをおいて家を出て、離婚。父親が養育していますが、小学3、4年の頃から父親から暴力を受けていました。父親は仕事はしていますが子どもたちの世話はほとんどせず、食事も満足にさせていないため、行政の子ども家庭センターも要支援家庭と考え、養育支援訪問指導ケースとしてNさんの団体が支援に入ることになりました。中1の姉には発達遅れがあり、中学校からは個別支援級に通っています。

週3回のヘルパー派遣は、夕飯作り、食事の見守り、子どもたちと一緒に掃除、そして入浴の見守りが主な支援です。住環境にも問題があり、エアコンは故障、風呂も使えず入浴はシャワーのみ。子どもたちは自分できちんと洗体、洗髪もできず、それを教えることから始めました。イサム君は調理は手伝いませんが、「〇〇が食べたーい」と夕食を楽しみにしていて、「ありがとう」と感謝の言葉を口にすることもありました。一方、父親は支援に感謝を見せず、料金を払うことにもし



はじめは…
腹へったー！



いまは…
僕、卒業したらNさんちに
居候するんだ。
Nさんを泣かせないように
しなくちゃ

ぶしぶでした。そのうち、父親は若い女性（当時 19 歳）を同居させるようになり、やがて女性が妊娠し再婚。赤ちゃんが生まれました。

このような家庭環境はイサム君にとって安らげる場ではなく、愛情をこめて関わり支えてくれる大人が不在であったため、自尊心を得て他者に対して愛情と信頼感を持つことが難

しかったと思われます。イサム君の学力は低く、性格も荒れていて、他者への暴力・暴言もありました。イサム君たちの支援を続ける中で、一週間のうち支援の入らない 4 日間、特に学校のない週末は子ども達は常に空腹であることがわかり、Nさんは自身が取り組む子ども食堂にイサム君兄弟を誘いました。

支援のプロセス

「気持ちがいい」を体感することの価値

食堂に参加するようになったイサム君は、よく食べ良く遊び、良く話す子どもでした。お腹一杯ご飯が食べられることをとても楽しみにしています。

衛生面では、週 3 回ヘルパーが入ってシャワー浴を促すものの、洗体・洗髪がきちんとできておらず、臭いもありました。夏には虫刺されを掻き壊し、血が出たままで脚や腕が黒ずんでおり、髪は伸び放題でした。そこで Nさんは、男性スタッフも一緒に、イサム君たちを銭湯に連れていくことにしました。初めて銭湯に行った時には、怖がって湯船に入れませんでした。何度か行くうちにイサム君兄弟はお風呂の気持ちよさを実感できるようになりました。家庭での入浴習慣も 3 年ほどでやっと身につけ、自分できちんと身体や髪を洗えるようになりました。最近は、ようやく臭いも気にならなくなりました。

傷つけられる心、そっと守られる心

食堂では元気にふるまうイサム君ですが、父親に対しては恐怖心があり、必要な学用品や小遣いが欲しいとも言えません。父親の暴言や手をあげることも続いているようでした。

行政は、父親・近隣に住む祖父も交えてカンファレンスを行い、指導や支援をしていましたが、なかなか改善はされません。父親も父子家庭で育っており、叩かれて育ったという経緯があるようです。

Nさんは、イサム君の心のうちを心配しました。子ども

への暴言・暴力には大人の怒りや非難がこめられ、それを繰り返し受ける子どもは委縮し、恐怖を持ち、自信を失います。暴言や暴力から逃れるために大人の前ではおとなしくしていても、見られていないと善悪の判断や行動のコントロールを失うことも考えられます。Nさんはこの頃から、自身の役割はイサム君兄弟が安心して関われる大人でいること、という想いを強くしました。Nさんは食堂のない日曜日は事務所にイサム君きょうだいを呼び、ご飯やおやつを用意し、のんびりとした環境で過ごせるようにしました。

そんな中、心配していたことが現実になってしまいました。イサム君の家のヘルパーと、子ども食堂のボランティアの財布からお金が抜き取られる事件が起きたのです。状況から、イサム君がやったとすぐに発覚しました。Nさんは「どういう気持ちでしてしまったの?」「どうしたかったの?」と問いましたが、イサム君は下を向いたまま長いこと沈黙し、そのうち大声で泣き出しました。その様子に切ない想いでいっぱいになったNさんは、イサム君をご飯に連れ出し、お腹いっぱい食べさせました。後日、イサム君は、スタッフに「お腹がすいていた」「お父さんがお小遣いをくれない」「ゲームセンターに行きたかった」などと話していました。

信頼の中で、育つ子どものココロ

その後もイサム君の盗みは何度も続きました。何も言いたくないと頑なにうつむくイサム君に、ある日、食堂の立ち上げ以来支援をしている団体の男性スタッフが話しかけました。「イサム君。Nさんを困らせてはダメだ。Nさんは君たちのことを心から心配しているよ。裏切るようなことをしたら、とても悲しむよ。Nさんはね、絶対に君たちを裏切

らないし見捨てたりしないよ。」

それからでしょうか、イサム君の盗みは収まるようになりました。そして困ったことがあると、SOSを出せるようになりました。今では、「学校卒業したらNさんのウチに居候するよ」と言っています。また、男性スタッフには「もうNさんを泣かせないようにするよ」とも言っているそうです。

あの頃はイサム君との信頼関係をもつ途上だったとNさんは当時を振り返ります。Nさんも他のスタッフも、皆が手探りでイサム君と向き合う努力をして少しづつ信頼が育まれ、その結果イサム君は、複数の信頼できる大人ができただけではなく、自分自身で「良心」を育てることもできるようになった、と思っています。

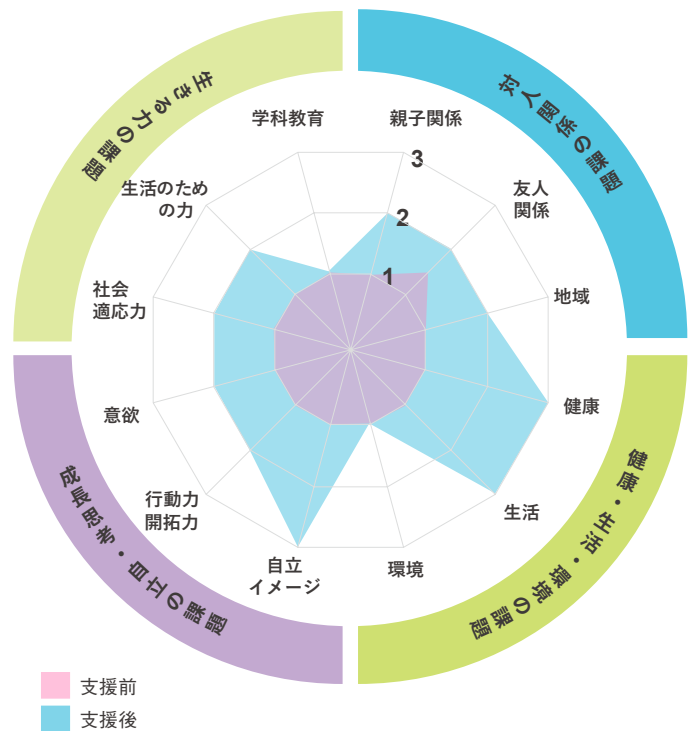
父親にもわずかに変化が・・・

父親が再婚して継母が出産し、養育支援のヘルパー派遣は終了となりました。継母はイサム君たちの世話も食事作りもしませんでした。親としてやるべきことを自覚させるためには、いつまでもヘルパーが入ることはかえってマイナスになると判断したからです。イサム君は継母を母とは認めず、受け容れていません。継母は夕飯だけは何とか作っているようですが、相変わらず子どもたちはいつも空腹です。「昨日から何も食べてないよー」とSOSが入ると、Nさんはご飯を届けに行きます。

父親は、再婚と子どもの誕生が、荒れた心に落ち着きをもたらしているようです。また、イサム君も、地域のサポートによって以前より家庭の中で委縮や脅威が少なくなり、父親との関係も劣悪な状況ではなくなっています。休みになると、父親は「Nさんの所に行くのか？」とイサム君に聞き、Nさんのサポートに対し「ありがとうございます」とお礼を言うようになりました。イサム君は、昨年「パパが変わってきたよ」と言っています。

様々な課題を抱える子どもや家族と共に

イサム君家族の課題がなくなったわけではありません。若い継母は赤ちゃんの世話に手一杯で、姉は発達障害があり、イサム君も学習面では大きく遅れています。中学生になって他人への暴力は消え、友だちも少しできてきましたが、何事にも集中力や持続力がなく、学習もできないうすぐ諦めてしまいます。学習支援の場が必要と感じていますが、現在の地域には寺子屋などの公的な学習支援の制度がありません。



Nさんの家事支援等を行う事務所や食堂には、様々な課題をかかえた子どもたちがやって来ます。それらの課題は、家事の支援や食事の提供をすれば解決するものではありません。家事や食の支援をきっかけに、一人ひとりの子どもや家族とのつながりを育み、姿、表情、行動から、刻々と変化する子ども達が置かれている状況を察し、寄り添うことを大切にしています。

Nさんの活動成果があるとしたら、そうした関係性の中で子どもや家族がSOSをつぶやくようになったときなのかなとも思います。ようやく伝えることができた「助けて!」はむしろ、子どもが家族が少し頑張れる、少し前に進めるときだと思うのです。

支援による変化

エンパワーされたこと

〈対人関係〉Nさんがイサム君の心に寄り添い、見捨てないという態度を示すことで、Nさんに心を開くと同時に、SOSを出せるようになりました。

〈健康・生活・環境〉養育支援のサービスや子ども食堂、Nさんの支援により、日々の食事や入浴などの生活環境は多少改善されました。健康や衛生状況を保つことが大切との自覚が本人にも少しずつ芽生えています。

ヒアリングを終えて

イサム君兄弟は、ネグレクトの家庭で育ち、基本的な生活習慣も身につけていませんでした。子育て支援のサービスが入り、なんとか暮らせるようにはなりましたが、父親はイサム君に対しては暴力をふるい、イサム君の気持ちは荒れていました。

本事例によって、虐待が、他者に表現できない苦痛や無力感を子どもに感じさせるものであること、また「愛されない、居場所がない」という不安のみでも自信や自己肯定感が持てなくなるうえに、信頼と愛情の下に育つ、生活するチカラさえ育てることができず、それがまた、社会で生きるうえで、信頼関係や愛着を結ぶ交流を妨げてしまうということがわかります。また、こうした課題は、親子にアプローチする必要があるにも関わらず、それが容易ではないこと

も痛感するところです。

Nさんは公的サービスの担い手でもあり、行政との関係も持ちながらの親子支援をしています。インフォーマルサービスである子ども食堂や、Nさん個人でも、イサム君への支援をしています。誰にでもできることではないかもしれませんが、考える必要があるとも思います。

しかしながら、イサム君との信頼関係を築き、イサム君が虐待を受け続けることで、二次的に起こったかもしれない、イサム君自身の育ちや行動の問題を小さくすることや、何より、イサム君の将来に向けた希望が失われなかったことに大きな価値と安堵を感じる事例です。

コラム



子どもの育ちには、温かなスープと清潔な環境が必要

遊Being♡あしがら 主宰 山崎 由恵さん Yoshie Yamazaki

ナイチンゲールは「看護覚え書」で「看護は新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさ、食事などを適切に整え、これらが本人の持っている自然治癒力に充分活用できるようケアすること」と、記述しており、生活を整えるエンパワメントにつながることを示唆しています。

本事例（個人情報が含まれているため、活動名称は表記しません）の活動については、私もよく知るところの活動ですが、まさに、上記を体現している活動です。

このケースのように、大人側の事情（離婚や経済的貧困等）で虐待やネグレクトの状態に追い込まれ、子どもを生活習慣の乱れに巻き込むことは、大きな課題です。

「食う・寝る・遊ぶ」は子ども達の安心・安全の保障であり成長の基盤でなければなりません。父子家庭に家事の負担軽減を行うだけでは、子ども達は救われません。

本事例の活動は、こうした制度では支えきれない課題を抱える子どもや家族を身近な地域で発見し、見守り、支え

る取り組みです。活動が掲げた理念にもある「質素であっても心をこめて作った食事」の提供を通して、お腹も心も温まる心地よい居場所の提供をしています。

行政のサービスか、地域の支援かという二者択一ではなく、子どもの育ちの過程で、何が必要なかを捉え、柔軟な支援で伴走し続けていることが素晴らしいと思います。

行政に、子ども達と銭湯に行く発想はありません。銭湯に行くことが、子ども達にとって支援ではなく、「楽しみな時間」となっていることが、更に優れた活動だと思います。

心地よさを伴った継続的な関わりは、年齢を追うごとに、ただケアしてもらう生活から、自分でケアできるようになり、生活習慣となります。

子ども達にとって、地域支援を受けるということが、沢山のひとと触れ合いながら、大人との信頼関係を取り戻し、子ども自身のエンパワメントにつながっていることを見事に証明している活動です。

Case 2

就労支援

ボランティア体験の場には、
心配して、見守ってくれる人がいた。
僕は少し頑張れるようになった。

事業所のプロフィール

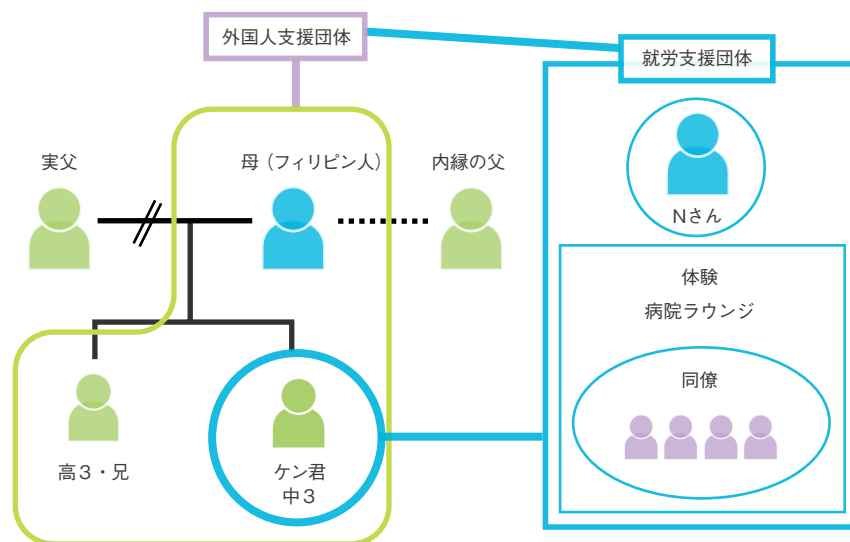
活動種別	就労支援
活動地域	神奈川県全域
活動開始年	2016年～
活動場所	県内100事業所以上
参加費	無料
主なネットワーク	ワーカーズコレクティブほか

進学するとき、社会に出て自立しようとするとき、どんな勉強・仕事をするのか、したいのか、どのように生きていくのか、自分の内面と向き合い対話し決定しなくてはなりません。が、誰もが自分の力で、前向きに、未来に夢を抱くことができるでしょうか。自分に自信が持てず、孤独で、投げやりになったり、諦め、背を向けたくなったりすることもあるかもしれません。本事例は、家族課題がある中、自らの将来に向けた大切な時期の向き合い方が見いだせず孤独に苦悩し、彷徨う、中学3年生男子の事例です。

彼の母親はフィリピン人で、母子世帯です。2010年の国勢調査では、外国人の母子世帯の失業率は、フィリピン国籍の場合13.3%で、日本国籍の母子世帯(7.8%)の2倍近い数

値となっています。フィリピンやタイにルーツを持つ子どもたちのひとり親家庭率は高く、母親は若い頃に来日した女性が多く、日本人男性との国際結婚→離婚というパターンが大半を占めています。今、新型コロナウイルス感染症拡大で雇用環境が悪化し、日本在住の外国人失業率も高まっていると言われており、こうした外国人ひとり親世帯が一層厳しい状況に置かれていることは想像に難くありません。更に本ケースは母親に軽度の知的障害もあり、生活保護受給をしているものの、子どもの育ちと自立には金銭的支援のみでは充分とはいえません。こうした家庭に育つ子どもを誰が見守り、支えていくのか、考えさせられるケースです。

PROFILE



ケン君兄弟の日本人の父親と母親は離婚しており、現在、兄弟と父親との接点はありません。母親には、一緒に暮らしてはいませんが、内縁の夫がいます。日雇い労働をする彼は、ケン君のことを気にかけてくれます。

ケン君の兄は、こうした家庭環境にあっても高校に進学しました。しかしケン君は、学校の勉強についていけず、不良グループの仲間に入っていたこともあります。学校の先生は、ケン君の勉強に対する姿勢や交友関係について、特に注意をしたり、相談

中学3年生のケン君(仮名)はフィリピン人の母親と高校生の兄と3人暮らし。母親は日本語が不自由で軽度の知的障害の疑いもあり、現在、生活保護を受給して生活しています。母親は家事も満足にすることができないため、兄弟にとって、安心できる家庭生活ではありません。食事の用意がされていないこともしばしばあり、お腹を空かせていることも多い毎日です。

にのることはなく、ケン君は、進路について、進学か就職か、ひとりで悩んでいました。

そんなケン君を放っておかず、気遣ったのは、母親の内縁の夫でした。ケン君が入っていた不良グループが、他の学校とケンカになったときには、駆け付け仲裁してくれて、ケン君にとっては、不良グループより強い頼もしい存在になっており、信頼しています。



はじめは…

大人は僕を叱ってばかり
僕は勉強もできないし、
高校は行けないかなあ



いまは…

今のお父さんとかまわりの人が
僕を心配してくれてるってわかった
高校に進学できた
将来は動物に関わる仕事がしてみたい

支援のプロセス

母親を支援する外国人支援団体からケン君について 就労支援団体に相談

フィリピン人の母親とつながりがあった外国人支援団体からケン君のことを紹介されたのが、就労支援団体の支援者のNさんです。早速ケン君の母親と連絡をとったところ、就労支援団体に、母親と内縁の夫と一緒に訪れました。そして、内縁の夫は、「ケン君に不良グループとの関係を断ってほしい」と語りました。髪を金髪に染め、派手なシャツを着た男性でしたが、Nさんは、ケン君にとって、日本語がおぼつかない母親に変わって、懸命に説明し、親身になって心配するこの人が、ケン君を支えていくうえで、大切なキーパーソンになるのではと感じました。

Nさんは聴き取りをすすめ、①進学か就労か悩むケン君に働く体験をしてもらう ②通い続ける場があることで、良くない仲間との関係が薄れることを期待 ③食事が満足にできない状況の改善、などを考え、就労受け入れをする提携団体と調整し、夏休みの就労体験を手配しました。就労体験先は、病院のラウンジ（カフェ）で、仕事は主にランチの後の皿洗い、体験料は無料、賄い付きです。

生活の場（エコシステム）の変化がケン君の心の変化に

Nさんは病院ラウンジの責任者にだけはケン君の家庭の事情を伝えました。ラウンジで一緒に働くオバちゃんたちは、ケン君の事情を知らなくても、なんとなく気遣い、ムリに立ち入ったことを聴くでもなく、和やかな雰囲気の中で一緒に働き、賄いを一緒に取りながら「おなかすいてんじゃない?」「ごはん食べられなかったら体験終わってもオバちゃんのところにおいで」などと近所や親戚の子のような感覚で声をかけてくれました。また「オバちゃんは中卒だけど、高校は行った方がいいよ」などと言ってくれる人もいました。この何気ない会話や、見守られ感のある職場で、ケン君は大人に気にかけてもらえる、働いて、褒められるという経験をすることができました。

就労体験を始めたばかりのある日のこと、ケン君は緊張と寝不足からか就労体験中に倒れてしまったことがあ

りました。スタッフが介抱し、内縁の夫も駆けつけてくれました。こんな経験さえも、ケン君にとっては、みんなに心配され、自分は一人ではないと感じられた機会になったようです。

共に支える大人たちの緩やかな輪

ケン君が就労体験をしている間も、内縁の夫は時々ふらっとコーヒーを飲みにもラウンジを訪れていました。外見は、ずっと変わりなく、「派手な服装に金髪」です。働くオバちゃんたちも初めは少々驚いたに違いありません。でも、Nさん同様、彼が、ケン君を気にかける、ケン君にとって、大切な存在であることに気づくのに時間はあまりかかりませんでした。しだいに、一緒にケン君を見守る大人として、緩やかな関係になっていきました。「悪い仲間から離れてほしい」と言っていた内縁の夫は、就労体験に賃金が出ないことは意に介せず「こっちがお金を払いたいくらい」と感謝の言葉を口にしていました。

新たな進路に向けて歩みだしたケン君

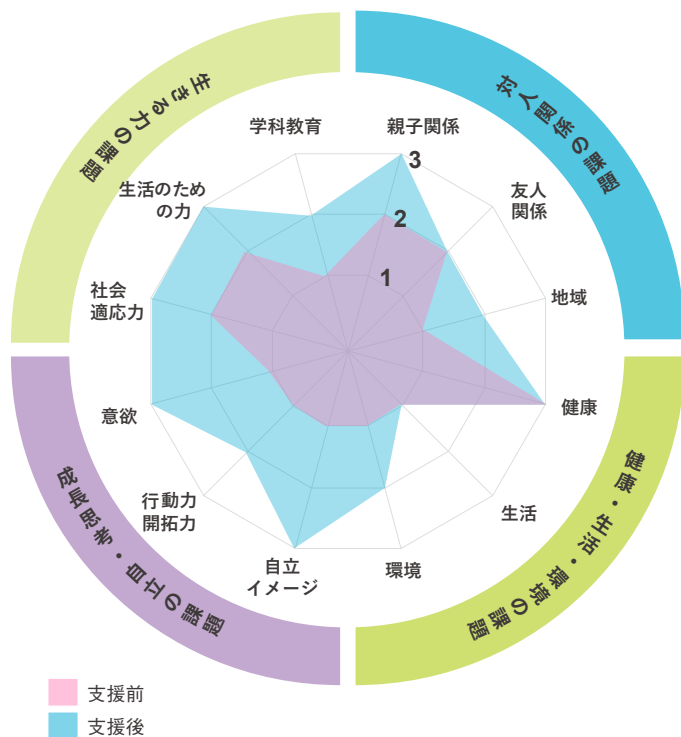
その後、ケン君は高校に進学しました。Nさんの団体とは関係は切れましたが、内縁の夫と二人で2～3回来所しました。一度、ケン君のアルバイトの紹介を希望しましたが、タイミング的に希望の仕事には欠員がなく叶いませんでした。内縁の夫には、必要な時はケン君に仕事を紹介するとNさんから伝えてあります。

支援による変化

エンパワーされたこと

〈健康・生活・環境〉

ケン君は、一人親世帯であることや支える親である母親が生活力が脆弱であることの影響を受けて、家庭環境としては、見守りが薄く、食生活等については特に課題がある状況です。家庭という場が、本人にとって安心できる場となるまでには、変化に至っていませんが、賄い付きの就労支援を行ったことによる食の確保、食事の心配を他者にしてもらうことなどを経験して、家庭環境に限らず、生活



環境によって安心感が得られることを体感できています。

〈対人関係〉

母親や兄との関係も希薄な中、唯一、内縁の夫がケン君を気にかけていました。しかし「大人は僕を叱ってばかり」とつぶやくケン君について、「他者から大事にされ自分も自分を大事にする経験」の乏しさからの言動とNさんは感じていました。ケン君は、就労体験を通して、仕事をやり遂げ、まわりに認められ、自信もついてきました。注目したいのが、職場のオバちゃんたちの存在です。ケン君に対して上から物を言ったり指示・指導したりする「縦の関係」ではなく、適度な距離感でむやみに立ち入らずにさりげなくフォローする「ナナメの関係」の役割が果たされています。

また、ケン君の人間関係について、不良グループとの関係が心配されていましたが、進学が決まったり、いざというときの居場所や人との関係ができたことで、こうした関係は薄らいでいくように思います。今後は、良好な同年代の友達ができることが期待されます。

〈生きる力・成長思考・自立〉

何事にも自信が持てず、孤立しがちだったケン君は、まわりに流されやすく進路についても、「高校には入らな

いが、兄と僕とは学力が違うし…」と進学を志せず、また、不良グループの仲間の就職の話など聞くと、自分の中学卒業後もそんな生活かなあと漠然と考えたりもしていました。

就労体験を通して、その場で知り合った人たちの対応で、ケン君は、「対人関係」の幅を広げ、仕事の成功体験とともにまわりの人たちの存在がケン君の自己肯定感やエネルギー・意欲を高め「成長思考・自立」の課題の改善につながっています。

ヒアリングを終えて

外国人の母、ひとり親世帯で育つケン君は、公的支援の対象となる可能性は高い存在ではありますが、ケン君への直接的な介入や、現状、ケン君の交友関係や進路選択の課題などに支援がされた形跡はありません。しかしながら、外国人であるお母さんの支援をしていた外国人支援団体がケン君のことも心配し、就労支援を行うNさんやNさんの団体にケン君のサポートを依頼したことが支援のはじまりとなりました。こうした支援団体間の連携に価値があります。Nさんのコーディネートによって、ケン君の日々の生活やおそらく未来にも変化をもたらしています。

しかし、カフェでの皿洗いという就労体験や共に働くオバちゃん達との人間関係を育てていったのは、紛れもなくケン君自身です。ケン君が、家庭や学校で獲得することができていなかった自分への自信や期待を持ち始めたことは、本事例の成果と思われます。

更に、本事例で忘れてはならないのは、ケン君を大切に思う母の内縁の夫の存在です。彼のケン君への心配がNさんやラウンジで働くオバちゃん達にも受けとめられ、共に見守ろうとする輪が育っています。彼にとってNさんは、ケン君を見守っていくうえで共感的な関係であり、自らも認められていると感じられたのでしょう。

地域福祉が実現する現場では、そこにいる人々のお互いを認め合う共感的な関係が、温かく安心できる環境をもたらすだけでなく、継続的な援助を可能にすると考えられます。それは、この事例からも、理解を深めることができました。



コラム



共感と対話の関係性

福岡・臨床ソーシャルワーク研究所 (CSWRI)・Kinugasa & Associates.

衣笠 一茂さん [Kazushige Kinugasa](#)

この事例で注目したいのは、ケン君の活き活きと生きてゆく力、すなわち社会と繋がる「主体性」が涵養されてゆく、その具体的なプロセスのあり方です。

レーダーチャートからも読み取れるように、「生きる力」や「成長思考・自立」について、ケン君の生活課題の顕著な改善が見られます。これは、何が要因となっているのでしょうか。

私はそれを「共感と対話の関係性」、つまり「他者とのかわりあい」を通して達成されていった、ケン君の主体的な人格の成長の故であると考えます。

外国人の母親の家庭に生まれ、父親は不在で、その母や兄との関係もけして良好とは言えなかったケン君は、地域社会の中でいわゆる孤立・孤独の状態にあったと推測できます。それゆえ、けして素行がよいとは言えない仲間たちともかわりを持とうとするのですが、ここで登場するのが、本事例で「キーパーソン」とされる母親の内縁の夫です。

彼は、(まるで父親のように) ケン君をけして見捨てることなく、置き去りにすることせず、一貫して「共感的なかわりあい」を通して、ケン君の存在を肯定し続けます。また、就労支援団体のNさんのところにも母親と一緒に足を運び、ケン君が就労体験をしていた病院のラウンジにもたびたびコーヒーを飲み顔を出し、ケン君の社会的なかわり＝病院のラウンジのオバちゃんたちに代表される「他者との対話的關係」のあいだを繋ぐ「媒介者」として

の役割も果たしてゆきます。

このように、ケン君は内縁の夫から「共感的な受容」を提供され、ラウンジのオバちゃんや就労支援団体、また外国人支援団体などのさまざまな地域の人々との「対話による存在の肯定」を実感することで、自己肯定感や生きる力、そして単に「生きている」だけではない、「生きてゆく」という主体性を持った一人の人格として、成長を遂げていくことになるのです。

このケン君の成長のプロセスは、私たちに支援の視点を「個」から「あいだ」、つまり関係性にシフトする必要性を示唆してくれます。例えば生活保護は「自立」を謳いますし、また本事例でも実際に「健康・生活・環境」の保障、具体的には経済的な生活環境の保障には十分に役立っているのですが、ただ「生存」している、つまり「生きている」だけではなく、主体的に「生きてゆく」という「生活」を営んでいくためには、支援の対象となる人と、その周囲にある人々との関係性のあり方、またそれを媒介する役割を担う「地域の住民力」が必要とされるのです。

いわば、「公助」が「生存」を、すなわちいのちを支えるのであるとすれば、「互助・共助」は「生活」を、つまり活き活きと生きてゆく主体性を育むのだと言っても良いでしょう。そして、それは「共感と対話の関係性」に代表される、地域の中での「かわりあいの活性化」を通じて達成されるものであることを、私たちはケン君の事例を通して、改めて知ることができるのではないのでしょうか。

Case 3

居場所

思春期の「うつ」

「うつ」は大人だけじゃない！
元気な自分を取り戻すサポート

事業所のプロフィール

活動種別	精神障がい児者等のリハビリテーション
活動地域	横浜市
活動開始年	2001年設立 中高生の居場所は2013年～
活動場所	借家
活動日	週2回放課後2時間半(中学生)ほか
参加者数(平均)	1～5人
参加費	1回500円/月額7000円
主なネットワーク	学齢期発達支援センター、クリニック、スクール ソーシャルワーカー、区社協、定時制高校など

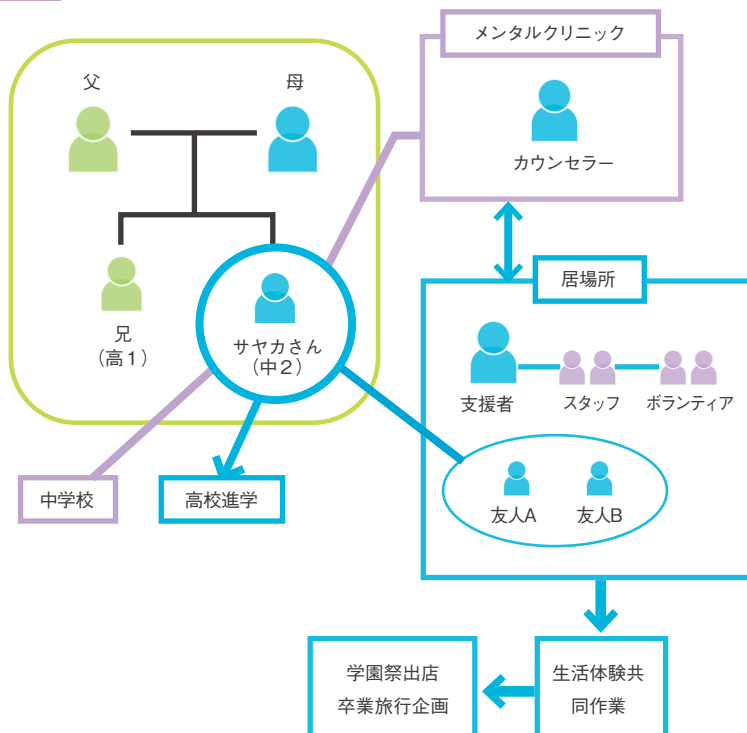
約30年前までは、子どもは大鬱病性障害（以下うつ病）を経験することはないと考えられていたそうです。しかし、最近の欧米疫学調査では、子どもの約5～8%にうつ病が見られ、年齢が高くなるにつれ頻度が増加していることがわかってきました。

うつ病は、成人と同じで中核症状として①抑うつ気分（イライラ気分）②興味又は喜びの喪失のひとつ又は両方、また他の症状である③体重の変化・食欲の障害 ④睡眠障害 ⑤精神運動性の焦燥または制止 ⑥易疲労性、または気力の減退 ⑦無価値観、または過剰であるか不適切な罪責感 ⑧思考力や集中力の減退、または決断困難 ⑨自殺行動 の7項目のうち5項目以上ある状態が2週間以上続くことで診断されます。

（国立成育医療研究センター「子どもの心の診療に関する診療体制確保、専門的人材育成に関する研究」）

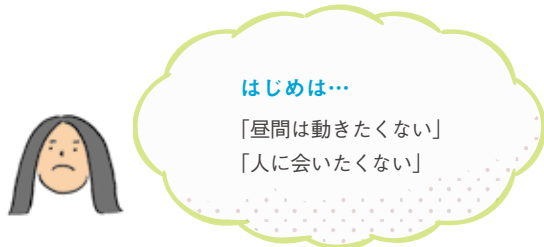
居場所の代表である精神保健福祉士のAさんは、さまざまなストレスに悩み、不登校だけでなく、何となく学校に行きづらい、集団が苦手と感じる中高生、うつや精神的な病、発達障害などを抱え、進学や就職に不安を感じるなど、そんな生きづらさを抱えている子ども・若者にとって、ゆっくり自分を見つめる時間、一人一人が安心できる、中高生の学童保育のような「居場所」が必要と思い活動を始めました。居場所は、空き家を利用した丘の上に建つ緑豊かな場所です。庭では家庭菜園もあり、野菜作りも行っています。スタッフには精神保健福祉士、社会福祉士、公認心理師などの専門知識を持ったボランティアも居り、温かく若者たちを迎え入れています。

PROFILE



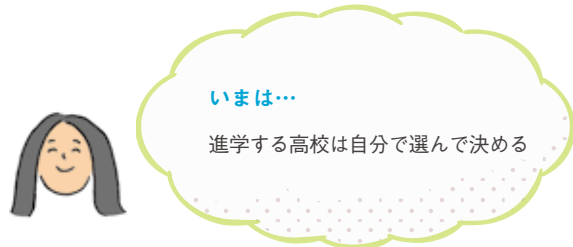
サヤカさん（仮名）は、両親と兄の4人家族です。サヤカさんは、中学受験をして私立中学に入学しました。家族は同時期に引越もしました。家族関係も良好で、小学校時代は特に問題はありませんでしたが、中学に入学すると、学校での勉強につまづくこともあり、次第に学習についていけなくなりました。学校も休みがちとなり、中学2年になると不登校となりました。

また、不登校に加え、うつ状態となり、メンタルクリニックに通院し、カウンセリングを受けていました。そのカウンセラーからカウンセリングだけでなく、学校以外で同世代と過ごせるような居場所にも通ってみてはどうかとアドバイスをうけ、Aさんの活動を紹介されて来所しました。



はじめは…

「昼間は動きたくない」
「人に会いたくない」



いまは…

進学する高校は自分で選んで決める

支援のプロセス

スタッフとの1対1の関係づくりから

はじめは、母の送迎で通所しましたが、サヤカさんは、ほとんどスタッフと話をしませんでした。「昼間は動きたくない」「人に会いたくない」と母に言っており、「ダメ」「できない」といった、否定とか評価的な言葉に敏感でした。

スタッフは、まず、サヤカさんの気持ちや行動、すべてを受け入れることにしました。できるだけ、いろいろなスタッフが1対1で、おやつと一緒に食べるなどして、サヤカさんが好きな話題で会話の機会ができるよう心掛けました。そうしているうちに、スタッフと打ち解け、幼い頃習っていたバレエの写真などを持ってきて説明してくれるなど、コミュニケーションがとれるようになり、週2回は居場所に通ってくるようになりました。

同学年女子三人の中のお姉さんの役割

サヤカさんが居場所に通いだした同時期に同学年の中学2年生の女子が二名来所するようになりました。一人は軽微な知的障害、もう一人は発達障害があります。二人はお互いをライバル視しているようなところがあり、活動中、しばしばスタッフの取り合い等で言い争いになり対応に手を焼いていました。

サヤカさんは、二人と話すこともありませんでしたが、おやつ作りやスポーツ、ゲームなど一緒に活動をするようになると、少しずつ、自然にコミュニケーションがとれるようになりました。スタッフの二人に対しての接し方などを見るうちに、自然とどのようなかわり方をすると良いのか感じ取ったのかもしれません。

二人がトラブルになった時には、サヤカさんが間に入り、「そんなことないと思うよ」「こう思ったんじゃないの？」などと、仲裁したり代弁したりすることで、放置しておけばエスカレートしてしまうような場面でも、二人がサヤカさんの声を聞き入れ、暴言が収まることも多くなっていきました。いつの間にか、同学年でありながらもサヤカさんが二人のお姉さんのような役割を果たすという関係性が生まれてきました。

主体的な参加・体験から取り戻す自己肯定感

不登校は中学2年から3年と続きましたが、居場所には継続して週2回参加しました。

スタッフは医療機関とも連絡を取り、居場所で把握している心配事や、カウンセリングの場に出て来た心配事を共有し、どう扱うかを相談しながら対応しました。「今のあなたで大丈夫」というスタンスを意識して、共感したり、褒めたりするなど、ポジティブフィードバックをし、ネガティブフィードバックはしないように努めました。

やがて、少人数での調理実習や園芸、野菜作り、アート活動等、サヤカさんは主体的に参加するようになり、その体験の中で少しずつ自信を取り戻していきました。居場所での役割や、スタッフや居場所での仲間からの一定の評価を得ることで、「できない」という劣等感や自己肯定感を喪失した状態から、回復に向かっていきました。

思考力や集中力が高まり自信をとり戻す

活動に積極的に参加するようになると、サヤカさんは急速に元気になっていきました。居場所の活動として行なった大学の学園祭での手づくり品の販売では、自分で企画し、ブースを出店し、当日の販売までやり遂げることができました。中学3年の居場所での卒業旅行は、率先してディズニーランドと猫カフェ訪問を企画、細かいスケジュールを立て実施しました。これらの活動をやり遂げたことは大きな自信につながりました。学校側の理解もあり、中2から中3は不登校でしたが、中学校を卒業することができました。

進学も自分らしい選択に

「進学する高校は自分で決める」と、いくつかの高校見学にも参加しました。「自分に合っているか」、「自由さ」、「制服」の3点が大事と考え、ある通信制高校に進学することを決めました。高校入学後はメンタルクリニックの受診もなくなり、居場所にも来なくなりましたが、現在は、友達もできて、アルバイトも始め順調な高校生活を送っています。

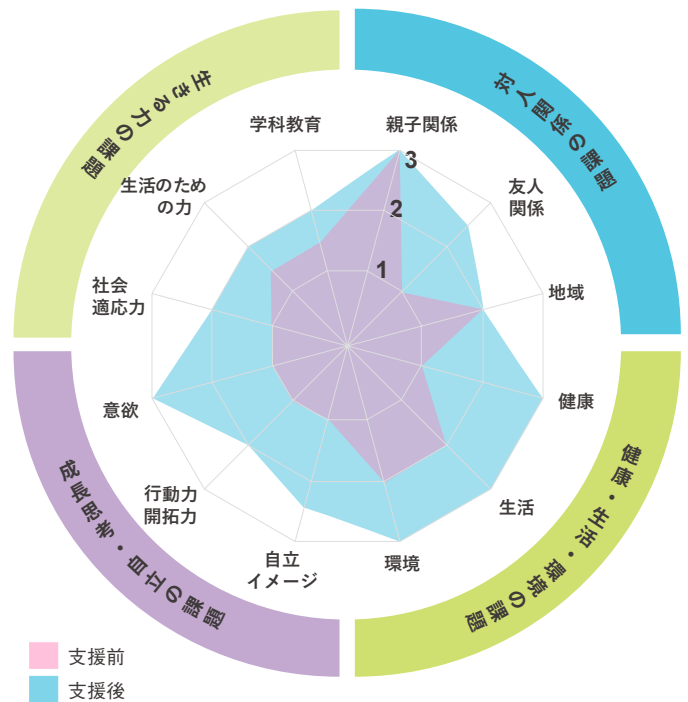
支援による変化

エンパワーされたこと

〈対人関係〉居場所では、スタッフとの1対1の関係づくりから始め、信頼関係を築いていきました。同年代二人の女子との関係の中で、自分なりの役割を得て自己肯定感を回復していきました。

〈生きる力〉居場所でのスタッフとの関わり、仲間との関わりの中で、どのようなコミュニケーションが大切なのかを学び、会得しました。

〈成長思考・自立〉役割を得て自信を取り戻すと、居場所での様々な生活体験を経て、自分からやってみたい企画を考え、認められ、実行するという一連の経験から、更に、居場所の外での学校や社会生活に対する意欲やエネルギーが引き出されました。



ヒアリングを終えて

成人期のうつ病と思春期のうつ病との違いとして、しばしばイライラが中心の症状となることがあります。また、周囲のことに無関心になるのではなく、むしろ些細なことに反応し、過敏になり過剰に反応することもあります。その他、過眠や過食があったり、不安性障害、発達障害など併存する精神疾患が多くみられ、自殺行動も成人より多くみられるなどの特徴があります。軽症の場合は、心理的介入、親への介入、学校地域への介入が数週間行われることが望ましく、中等度以上の症例では薬物療法を第一選択に行うことが可能ですが、同時に、心理的介入、親への介入、学校地域への介入が数週間行われることが望ましいと言われます。

(国立成育医療研究センター:「うつ病の診断」「12歳以上の治療マニュアル」より)

本事例のサヤカさんは、中学校に入学後、勉強についていけなくなり、周りの同級生と比べて「できない自分」を感じ、不登校となってしまいましたが、その原因や傷ついた理由はおそらくサヤカさん自身もわからなかったのではないのでしょうか。しかし、上記の思春期のうつ病の特色にあるように周囲の些細なことに過剰に反応し、「ダメ」「できない」に敏感になり、不安や焦りの中でサヤカさんは葛藤してい

たことが伺えます。

来所当初は自己肯定感が低く、劣等感も強く、周りとの対人関係に課題がありました。家族の対応としては、母親は「無理に学校に行かなくても良い」と言い、我が娘の様子を見てメンタルクリニックへの受診を促し付き添いました。むやみにサヤカさんを登校させず、学校に向かえないサヤカさんを受け止めていたことも、状況の悪化を防ぐことにつながったのかもしれません。

居場所には、精神保健福祉士や社会福祉士など専門の知識を持つスタッフも関わっており、サヤカさんの状況をスタッフが良く把握し、医療機関とも連携し、焦ることなく、サヤカさんの人との関係性・学びや生活への意欲や思考力・行動力など、自信を失っていたことを取り戻せるよう、目的を共有し、チームとして対応したことが、サヤカさんの自己肯定感を回復させ、意欲や行動力を育てています。

学齢期の子どもであっても精神的な生きづらさを抱える子どもたちが増える現代。家庭や学校の他のサードプレイス(居場所)の必要性を、丘の上のそうした子どもたちを守り育もうとする温かな手作りの場に伺って改めて確信しました。



子どもの心のサポートは背景を紐解きながらワンチームで

東海大学健康学部健康マネジメント学科 准教授 公認心理師 臨床心理士 精神保健福祉士

舩松 克代さん Katsuyo Henomatsu

近年、子どものうつ病は増えているとはいえ、精神医学的に診断をつけるには慎重に経過を見る必要があります。気分障害にはうつ病と躁うつ病があり、まずその鑑別が大事で、ある程度長い経過を見ていかなければわからないことが多いです。また基底に統合失調症や自閉症スペクトラムなどがあることによってうつ状態を引き起こしている場合もあります。今回のサヤカさんの場合は、うつ状態は呈していますが、明らかに学校環境がストレスとなって原因が明白なので、うつ病というよりは精神医学的には適応障害と言えるでしょう。子どもがうつ状態を呈している場合は、何が原因や引き金となっているか多角的なアセスメントが必要になります。医療の専門家は、子どもたちの日常生活から遠いところにいますので、家庭や友だち、学校などからの情報を収集し、生活環境のアセスメントが重要になります。サヤカさんがどこまでうまくいって、どこから躓いているのかを細かく見ていくと、小学校までは上手くいっていたようです。つまりは信頼している人との基本的信頼感が樹立でき、学童期で学ぶべきルールにのって集団で生活する能力もあることがわかります。思春期以降、人との違いを感じながらアイデンティティーを確立していくプロセスで躓いていたのでしょう。どのように成

長してきたかを紐解くとどのようにサポートしていけばいいのかヒントが見つかります。サヤカさんは、中学という集団の中で上手くいかなかったように見えますが、本来は集団での適応能力も有していることが生活史からわかります。ですから集団の中で自己肯定感を高め、自分らしいアイデンティティー探しができたことが、未来につながっていったと言えるでしょう。子どもたちが生きやすい暮らしを構築していくには、医療や福祉施設などフォーマルな機関だけでなく、専門家じゃないからできるインフォーマルなサポートも上手に使っていく必要があります。子どもの支援は子どもだけを支えていてもうまくいきません。親やその兄弟、学校の先生と連携をとりながら、支え合うワンチームになる必要があります。子どもたちの支援は、画一的にいかない難しさがあり、テーラーメイドな支援が重要になります。筆者が支援で大事にしていることは、子どもたちは本来、軌道修正していく力を持っていること、それを信じていること、何もしないで静観しているのではなく、声をかけ続けながらも応援団のポジションでいることです。そうすると昨日はうつむいていた子どもが今日は見違えるような表情をする瞬間に出会うことが多いのです。



Case 4

学習支援

先生が見守ってくれたから、
自分のルーツに自信を持ち、
未来に夢が持てるようになった

事業所のプロフィール

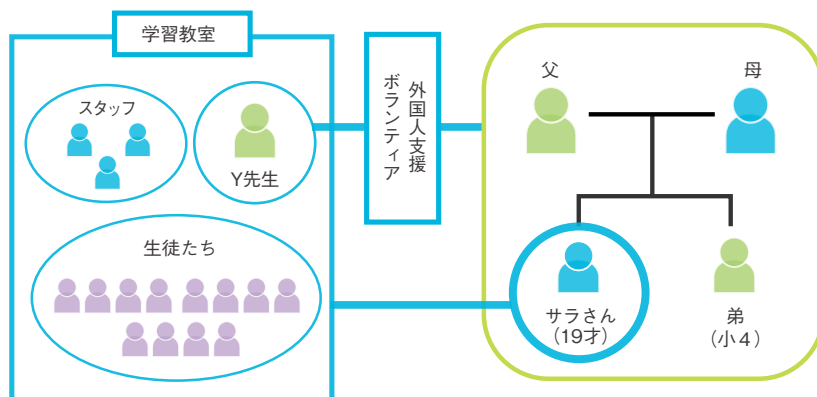
活動種別	学習支援・日本語支援
活動地域	相模原市
活動開始年	1998年～
活動場所	団地集会室
活動日	週1回2時間
参加者数(平均)	10～15人(コロナ中は人数制限、 緊急事態宣言中は活動休止)
参加費	無料
主なネットワーク	外国人支援団体、国際交流ラウンジ

「外国人児童生徒受け入れの手引き」(2019年3月改訂 文科省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課)によると、日本の学校に在籍する外国人児童生徒は、平成30年度時点で小学校に59,094人、中学校に23,051人、高等学校に9,614人、その他で、合計約93,133人となっています。日本語指導が必要な外国人児童生徒数については34,335人で、小中学生が全体の91%。外国人児童生徒の母語は、ポルトガル語、中国語、フィリピン語、スペイン語が全体の約8割を占めています。更に、これら、日本語指導の必要な児童生徒は集住化、散在化の傾向がみられ、全国1,747の市町村の約半数に外国人児童が在籍しており、100人以上在籍する市町村も増加傾向が続いています。

外国人児童生徒等の現状と背景は多様で、1)言語、文化の多様性 2)日本にきた理由、時期、将来設計の多様性 3)家庭環境の多様性、等を尊重しつつ、理解を深め、適切な支援を行う必要があります。特に顕在化している課題は、1)学校への適応、居場所の確保 2)「学習するための言語能力」の習得 3)学力の向上 4)かけがえのない自分をつくりあげていくこと 5)不就学、母語・母文化の保持、進路の問題です。

本事例は、こうした外国人児童生徒たちが直面する課題を知る元中学校教師による、言葉や文化の壁、差別や偏見やいじめなど、色々な生きづらさを抱える子どもたちと家族へ寄り添い育ちと自立を支援するものです。

PROFILE



サラさん(仮名)は両親と弟の4人暮らし。父は十代で難民として東南アジアから日本に移住し、成人後に親同士が決めた結婚を同じ国の女性としました。戦乱の収まった母国で親戚に囲まれて式を挙げた後日本に戻り、外国人労働者の多い団地で結婚生活が始まりました。夫婦ともに親族に仕送りをしながら働く中、サラさんと弟が誕生しました。父親は日本語が

流暢で、工場勤務で日本人と遜色のない収入を得ていました。しかし、人間関係等のトラブルを起こし転職も繰り返しました。また、クレジットカードによる多額の借金を重ね家計を苦しめました。母親は、結婚を機に来日したため言葉に苦労しながら、夫の借金を返すために仕事を掛け持ちし働く生活を続けましたが、幼い子ども達に満足な食事を与えられないこともありました。

母語で会話していた家庭生活の中、2人の子どもの日本語も母語も文字を学ぶ機会はありませんでした。小学校に入学して初めて文字を習いますが、同級生がひらがなの読み書きを小学校入学前に習得していることが多い中、スタートからハンディを負い、家庭でのサポートも難しいため、サラさんは小学校の勉強についていくことが難しい状況でした。

支援のプロセス

劣悪な家庭環境のなかで学習教室も遠のく

市立中学の男性教員Y先生は、外国籍住民が多い団地を

学区に持つ中学校に移動したときに、外国につながる子ども達が学校の中で差別されたり、不登校になったり、暴力的になったりなど厳しい状況に置かれているのに気付きました。この子達に学校の中だけで関わるのは難しいと思い、



中学の頃は

あんなお父さん追い出したい



いまは…

自動車整備士になって
親に家を買ってあげたい。
後輩に自分の体験を話したい。

校長に頼んで団地の集会所を週一回借りてもらい、職務外のボランティアとして外国につながる子どもを対象とした学習会を始めました。23年前のことです。Y先生は中学生の学習指導のみならず、生徒たちの家庭を訪問して保護者とも話し、生活全般の困り事や進学・就職の相談にも乗るようになりました。次第に、支援の対象は小学生にも広がり、当時、小学校低学年のサラさんがやってくるようになりました。サラさんの家に訪問すると、深夜のコンビニの弁当作りや皿洗いなどのアルバイトで母親が不在がちな生活であることがわかりました。また、面談した母親に青あざがあるのを見て父親による暴力を、そしてサラさん自身の衛生状態にも問題があることを体臭等から気づき、Y先生は心を痛めていました。

低学年のうちは学習教室に通い続けていたサラさんでしたが、5～6年生の時期、父母の夫婦関係が悪化したことをきっかけに、学習教室に来なくなってしまいました。

中学時代 母親とともに家庭を守る

サラさんが中学に進学した後、再び学習教室に通ってできるようになりました。成績は1と2ばかりでしたが、同じ国にルーツを持つ友だちと一緒に部活に所属し、得意な絵を描いていました。再びサラさんの家庭に関わるようになったY先生は、思春期のサラさんの衛生状態が悪いことで排除の対象になりかねないことを案じて、女性の外国人支援のボランティアに、本人が気づき、衛生的な暮らしができるよう助言してもらえよう頼みました。

父親の身勝手ぶりは相変わらずで、両親についてサラさんは、「お母さんがかわいそう、あんなお父さん追い出したい、お母さんと暮らしたい」とY先生に漏らすようになっていました。そんな中、サラさんが中2か3年の頃、家賃が払えなくなり、一家は団地退去となり、借金まみれの父に替わって母の名義で別の団地に移りました。Y先生は転居先に訪問し「家族のために、お金はしっかり管理し借金を返済しなければいけませんよ」と父親を諭し、父親の給料は銀行振込にし母親がお金の管理をすることになりました。生活に踏み込んだ事でしたが、サラさんとの信頼関係を築いていたからこそこの提案でした。引越しを境に、父親の暴力や暴言は消えました。

ひとつの経験が自信になり未来に希望を持つ

サラさんが中3の時、転機が訪れました。地域の国際交流フェスティバル開催にあたり、外国人が自国を紹介するイベントで、ルーツである両親の国の紹介をしてみないかとY先生が尋ねたところ、サラさんは「やる」と答えました。Y先生にとって嬉しい驚きでした。パソコンでスライドを準備し、発表当日、サラさんは聴衆を前にマイクを使って伝えました。緊張感の中で発表をやり遂げたサラさんにY先生は感動しました。その時から、サラさんの姿勢は更に変わり、Y先生に対して、「私はこうなりたい」と未来への希望も話すようになりました。

進路については、全日制高校に入るには成績が達しておらず、Y先生は定時制高校を勧めましたが、サラさんは自分で好きな美術を学ぶことができ、就職に役立つ技術も身に付けることができる通信制の高校を見つけ、学費は母が借金して工面することになり進学しました。

高校進学から自立へ～後輩に経験を伝えたい

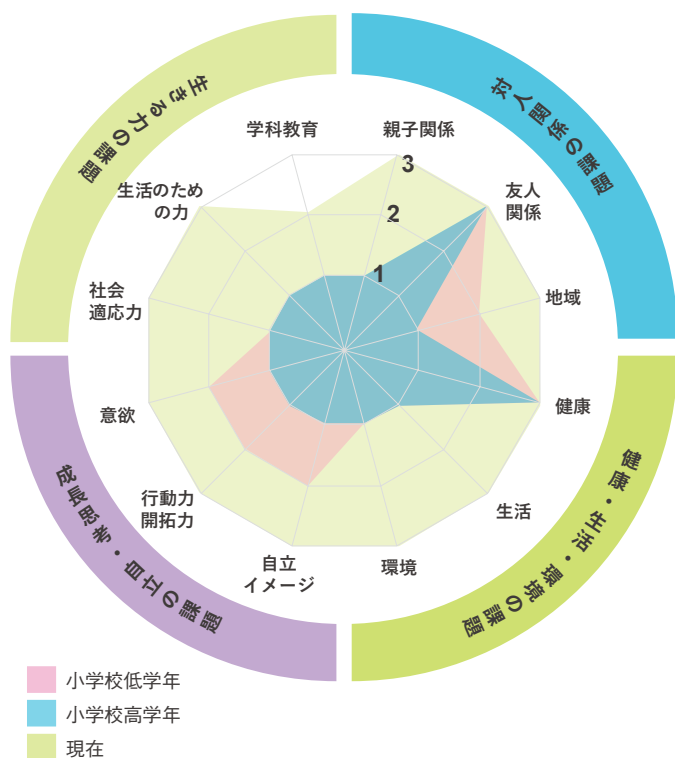
サラさんは、高校卒業後の進路についても自分で調べていましたが、次第に現実の厳しさが見えてきて、芸術方面でプロを目指すことは難しいと考え、気持ちを切り替えました。成績の面では、入学時より徐々に上がり上位になりました。高校3年の時、Y先生はサラさんの家を訪ね進路を尋ねると、「学校で紹介された自動車販売店への就職を考えている」と応えました。過去に、教え子の外国人生徒が就職内定後に日本国籍が必要と言われたりしたことなどもあり、もし不利な扱いがあれば、後ろ盾となる心づもりでした。しかし、サラさんは面接を経て、見事合格することができました。母親は泣いて喜びました。

自動車販売店では、事務系の仕事と整備士系の仕事のどちらか選択することができることがわかり、サラさんは「整備士系の仕事」を選びました。「手に職を付けるのは良いこと」とY先生はサラさんの選択に賛成しました。

そしてもう一つ、サラさんは、後輩に自分の経験を話したいとY先生に言うようになりました。過去に経験した理不尽な思いや、知っていれば回避できたことなど、自分の経験を伝えることによって後輩の苦労が減らせたら、と考えたのでしょう。あるいは、今、前を向いて進めるようになっ

た自分から応援のメッセージを伝えなかったのかも知れません。残念ながら、実現の機会はなかったのですが。

就職したサラさんは、新入社員として忙しい日々を過ごしています。Y先生は、就職前の冬に家庭訪問したきり直接会っていませんが、電話でやり取りを続けています。「お金を稼いで、親に家を買ってあげるのが夢」とサラさんは言っているそうです。そんなサラさんを見て、自信を持って、前向きに生きることができるようになったと感じています。



支援による変化

エンパワーされたこと

このケースでは、本人の成長と、家庭環境が安定するにたがって、各指標が大きく改善しています。諦めず努力を続けることができたのは、Y先生による学習を超えた生活の見守りが一因といえます。また「本人の意思によって選択する経験」の場を与えられたことによって、段階を経た納得と自信を獲得したのでしょう。

〈対人関係〉

学習教室でY先生がナナメの関係として関わり、地域に居場所が広がりました。

〈生きる力〉

継続的な学習支援が、高校時代の学力の向上を支えました。

〈成長思考・自立〉

小学校高学年の時に家庭が荒れて学習教室に足を運ぶエネルギーも削がれてしまいましたが、家庭が落ち着いてからはエネルギーや向上力が高まり、Y先生からの進路の情報やアドバイスの提供により、本人が自分で調べ、納得のいく進路選択に繋がりました。また、国際交流フェスティバルで自分のルーツの国を紹介したことが転機となり、自信につながりました。

ヒアリングを終えて

サラさんの家庭は、生活困窮世帯とはみなされず公的支援の対象にはなりません。しかし、生活の実態を見ればDVやネグレクトが疑われる状況です。そのため、両親に対しても、責めることなく、時間をかけ信頼関係を築き寄り添っています。サラさんには、学習支援だけでなく、生活するうえでの様々なアドバイスを行い、励まし、心の安定に導き、本人が、自信を持ち、自立に向かおうとする意志を育てています。

Y先生が長年関わる、外国に繋がる人たちは、そのルーツも来日の理由も様々です。例えば、インドシナ難民として母国(ベトナム・ラオス・カンボジア)を逃れ日本に定住する家族。治安が悪い南米から先祖のルーツである日本に逃れてきた日系人。旧満州の残留日本人孤児の子孫。日本で働き祖国の家族や親せきに仕送りをしたり、呼び寄せたりするアジア諸国の人たち。中には祖国で医師や技師などの知識階級でありながら、命の危険にさらされて来日し、工場の組立業務などに就く人もいます。

在留資格の認定が厳しく強制出国命令に怯えて過ごす人も、日本語が上達できず生活に支障をきたす状況が続く人もおり、教員時代のボランティアから現在まで、日本での暮らしに困難を抱える外国人が減少しているとは思えない今があります。

それは子ども達も同様です。サラさんたちのように、日本で生まれ育っても就学前の言語体験の乏しさから勉強に苦勞する子どもがいます。日本の学校で言葉の壁やいじめなどによって、自己肯定感や自立への意欲が持てず、進学につまずいたり中退したりすることもあります。アルバイトや就職で、不当に落とされ傷つく生徒も少なくありません。親

の通院の際に通訳として同行するため学校を休んだり、親が仕事で家を空けるため家事や弟妹の世話をしたりする、「ヤングケアラー」もいます。このような、子ども本人の力だけでは解決できない事情があり、Y先生は日本人と外国籍の生徒との学力の違いや進学・中退の状況について調査が必要と考え、行政等にも意向を伝えています。

学校の個人面談や懇談会、進路説明会では、外国人の親に支援が必要です。学校では、多言語による進学ガイダンスを配布するのみで、日本語が不自由な保護者に面談等の際、通訳をつける制度があるのですが、利用されていないため、外国人の保護者は、状況を掴めず、必要な質問さえできないことが多いそうです。Y先生は、必要な情報が行き届いていないことで、外国人の子どもや家族の不利益が生じないよう、しっかりした対応が必要と訴えています。

Y先生自身が家庭訪問で高校の話をする時は、説明に対して言葉で「わかった」というだけでなく、本人、親が納得し「わかったという表情」になるまで説明するようにしているそうです。

外国出身の親たちは日本に馴染むことに手一杯で、子どもたちは、日本語は話せるものの母国の読み書きや文化には触れる機会がありません。Y先生は、母国の文化を知り、自分のルーツに誇りを持てるようにと、様々な機会を作ってきました。中学在任中の文化祭での中国系生徒二人による漢詩の原語での朗読や、国際交流フェスティバルでのサラさんのような母国の紹介や母語での歌の発表などです。大勢が自分の発表に聞き入り認めてくれる経験を経て、子どもたちは、自信をつけ自分のルーツをよりオープンにする、という変化を見せました。

Y先生の学習教室では、中学生、さらに小学生の学習指導、大人の日本語教室、と目の前の困っている人たちに対して支援を広げてきました。家庭訪問したり、体調を崩して入院する親のお見舞い、小中学校の運動会に子どもたちの様子を見に行ったりと、学習指導を越えた付き合いを重ねています。子どもたちが、多様な人とつながり、認め認められ、孤立感や劣等感を持つことなく、自信を持ち、自立につながっていくことを願っています。そして、自分のルーツに誇りを持てるようになることも大切なことです。

本事例から、多様な外国につながる人々、そして、その子どもたちの暮らしの課題を、更に、子どもと家族に求められる支援の多様性を改めて知ることができました。また、その道のりは決して容易ではないけれども、彼らの心のよりどころとなる場や人が、継続して身近な地域に存在することの重要性も理解することができました。

この事例はまさしく人生を丸ごと受け止める伴走型支援の象徴です。私たち支援員の要である「きっかけづくり」、このきっかけづくりがみるみるうちに自信につながって行く様子に、私たちは元氣や勇気をもらえます。子どもの成長発達の時間の中で地域が支えになったことやよき支援員に出会えたこと、何よりも当事者が通える「居場所」があるという地域力。そこに行けば誰かいる、話ができる、一緒に遊べるなど生きていく為の大切な要素がたくさん詰まった場所で成長し感じる事が、当事者の力になると感じています。外国人の法整備も含めて、「こんなことあったらいいな」「こうだったらいいのにな」とみんなが感じていることがなかなか前には進んでいないことが現状です。しかしながら、この事例の様に、地域が支え共に歩んでくれる方々の存在が圧倒的な力を発揮します。

地域の方々や人とひとのつながりから生まれる「生きる力」は夢や希望、そして前進していくこと、一緒に喜びあえる関係がこの事例にたくさん詰まっていることが手に取る様に見えることに共感します。

コラム



夢や希望を生み、一緒に喜びあえる関係に共感

ワーカーズコープ連合会センター事業団
神奈川事業本部 事務局長 鳴海 美和子さん
Miwako Narumi

この事例を読ませて頂き、「自信」「未来」「夢」へと前進していく様子が胸が熱くなりました。

両親が日本で暮らす事になった背景や、見知らぬ土地で「生きる」という勇気、そこには日本で生まれ育った私たちには計り知れない苦労があるに違いありません。当たり前が当たり前出来ない葛藤と慣れない土地での言葉の壁。その家族だけでは解決できない事が沢山あり、解決のためにはコミュニケーションの存在が第一歩です。しかし海外からの移住者にはコミュニケーションのハードルが高く、また他民族で有るがゆえに生活スタイルの違いから孤立しがちになります。

当事者や家族が地域で支援先（支援員）に出会えたこと、学習支援から、生活支援（困りごと）、進学、就職相談…

この事例はまさしく人生を丸ごと受け止める伴走型支援の象徴です。私たち支援員の要である「きっかけづくり」、このきっかけづくりがみるみるうちに自信につながって行く様子に、私たちは元氣や勇気をもらえます。子どもの成長発達の時間の中で地域が支えになったことやよき支援員に出会えたこと、何よりも当事者が通える「居場所」があるという地域力。そこに行けば誰かいる、話ができる、一緒に遊べるなど生きていく為の大切な要素がたくさん詰まった場所で成長し感じる事が、当事者の力になると感じています。外国人の法整備も含めて、「こんなことあったらいいな」「こうだったらいいのにな」とみんなが感じていることがなかなか前には進んでいないことが現状です。しかしながら、この事例の様に、地域が支え共に歩んでくれる方々の存在が圧倒的な力を発揮します。

地域の方々や人とひとのつながりから生まれる「生きる力」は夢や希望、そして前進していくこと、一緒に喜びあえる関係がこの事例にたくさん詰まっていることが手に取る様に見えることに共感します。

Case 5

子ども食堂

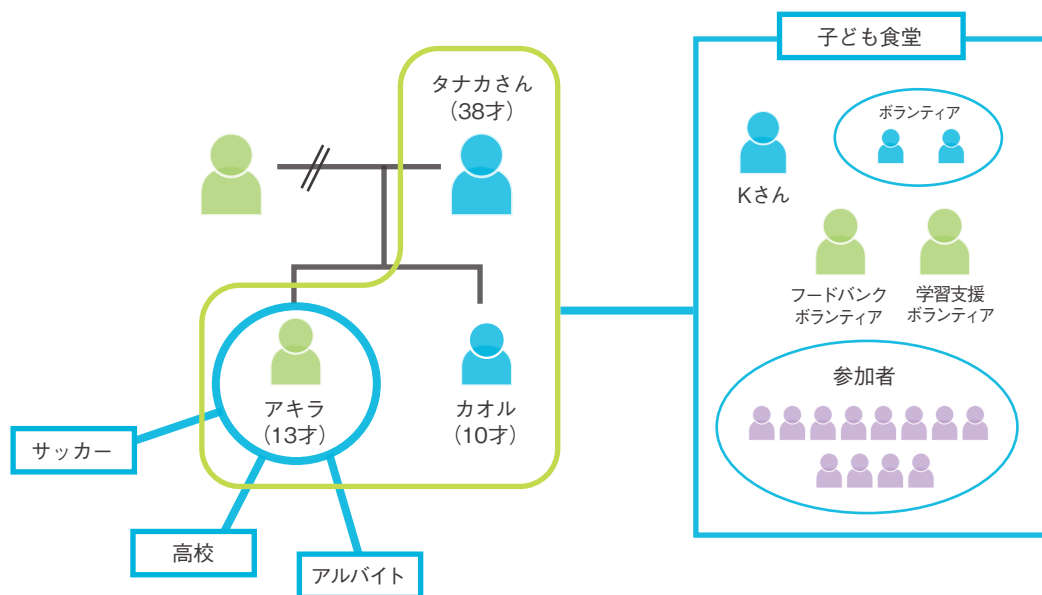
生きるチカラを育む 子ども食堂！ 自信を持って歩みだす親子

事業所のプロフィール

活動種別	子ども食堂、ひとり親食料支援
活動地域	横浜市
活動開始年	2018年～
活動場所	公共施設
活動日	月2回（コロナ中は3部制）
参加者数（平均）	35家族（登録：約50家族）
参加費	無料
主なネットワーク	フードバンク、社協、区役所、子育て支援拠点、子ども食堂ネットワーク

心身の課題や生活上の課題があることで、公的な施設等で入所生活をする場合があります。こうした施設は、終の棲家である場合もありますが、施設内で支援を受け、地域での自立生活を目指す通過施設もあります。本事例は、こうした通過施設で暮らしていた母子世帯を、地域生活移行時、地域の居場所が見守り支えたケースです。施設から地域に生活に移すときの不安や困りごとは、母親にも子どもにもあると思います。ひとり親世帯を支える地域の居場所ならではのサポートが親子の生きる力を高めています。

PROFILE



タナカさん（仮名）は、妻である自分に暴力をふるい、娘に性的虐待を続けた夫から逃れ、他都市より神奈川県内の施設に入所し生活をしていました。施設入所当初は、タナカさんは、夫の激しい暴力から逃れたものの、辛い暮らしの記憶が鮮明に残り常に不安感がありました。一方、子ども達も、長男のアカラ君は小学生でしたが、乱暴な物言いが目立ち、ちょっとしたことで暴力をふるってしまい施設スタッフも対応に困る子どもでした。また、妹のカオルさんは、いつも何かに怯えている様子で、影の薄い女の子だったそうです。

それでも、施設での生活を2年ほど続けた頃から、親子ともに、生活環境にも慣れ、職員とのかかわりの中で、少しずつ落ち着いた生活ができるようになりました。中学生に

なったアカラ君は、暴力をふるうようなことはなくなり、学校では、サッカー部に入部しました。施設の泊まりがけキャンプでは、日帰りで帰るスタッフに「一緒に泊まれないの？」と言ったりもするようになりました。入所5年目、タナカさん親子は、施設を退所し、アパートを借りて3人暮らしを始めることになりました。生活保護を受給しながら、タナカさんは仕事も始めることになりました。

地域での親子3人の生活には、頑張っていこうという想いも期待もある一方、頼れる親せきや知人もなく、2人の子どものとやって行けるのだろうかという不安があります。そんな時に、子ども食堂を紹介され参加することになりました。



はじめは…

イヤだ！この野郎！
あっち行け！



いまは…

ありがとう。
数学わからないから教えて

支援のプロセス

親子が安心できる居場所、地域とのつながりの場

食堂のリーダーKさんは、福祉施設で働いていた経験から、施設を退所した母子世帯が地域で孤立することが多く、地域の人とのつながりや、気軽に相談などでもできる安心できる場が必要と考え、子ども食堂を立ち上げました。

地域に移り住んできたタナカさん親子に、Kさんは、子ども食堂のチラシを渡し、「安心して来てね。待っているね」と声をかけました。タナカさん親子は最初、不安げでしたが、境遇の似た親子もいて、次第に打ち解け、楽しく食事をするようになりました。もともと明るく社交的なタナカさんであることがわかってきたKさんは、更に「ここでは誰とでも仲良くしてね」と他の参加者との交流も勧めました。

一方、子どもたちは、今までの閉鎖的な環境から、遊び相手がたくさんいる子ども食堂で、年齢を超え、遊びを工夫して、元気に仲良く遊ぶようになりました。下の年齢の子どもの面倒を良く見るので、スタッフや保護者から「ありがとう、助かったわ」と褒められ嬉しそうです。

子ども食堂は、タナカさん親子にとって、食事が提供されるということのみでなく、季節ごとの行事やボランティアとのレクリエーション、参加者同士でのおしゃべりなど、地域の人とのつながりを得て、楽しい時間を過ごす、安心できる居場所になっていきました。

男性への恐怖心の払拭と豊かな人間関係づくり

夫から、父親からの暴力を受けたトラウマがある、タナカさん親子は、はじめは子ども食堂に男性が居ることに恐怖感をもってしまい、フードバンクのボランティア男性には目を合わせない、話しをしないという状況が続きました。男性が食材の使い方について「こうやって調理すると美味しいよ。もっと持っていけば？」などと話しかけても、タナカさんは会釈するだけ、カオルさんは母親の後ろに隠れてしまいます。それでも毎回顔を合わせていくうちに、「ありがとうごさいます」と返事が出るようになり、2年ほどかかりましたが、フードバンクの男性と普通に話ができるようになりました。

Kさんは、男性のスタッフの存在が、母子を居づらくさせ

るのではないかと考えましたが、いつまでも男性不信では自立することができない、男性スタッフやボランティアとの関わり、コミュニケーションの中で、ゆっくり信頼関係を築くことが大切思うようになりました。そして、そういう男性が、子どもにとっての男性や父親のロールモデルになるとも考えました。食堂は、主として母子家庭の参加がほとんどですが、子どもの中には、父親不在だからでしょうか、男性スタッフにべったり甘えるケースもあります。Kさんは、どちらの場合も互いを知り合い、信頼関係を育て物理的な距離感を縮めていくことが大切であり、将来に渡ってより良い人間関係をつくるために、安心できるこの場で様々な人との関わりを経験できたらと思っています。

勉強がわかる楽しみ

父親の暴力に怯えるアキラ君、カオルさんの家庭では、勉強する環境が家庭の中にありませんでした。施設入所後は勉強する場はあるものの、根気がなく、すぐに「わからない」と投げ出していました。だから、学力は二人とも低い状態でした。

子ども食堂では学生のボランティアが子どもの勉強もみています。アキラ君、カオルさんは、はじめは参加しようとしませんでした。他の子どもたちが勉強している様子を見て興味をもつようになりました。しかし、基礎学力のない二人は、学生ボランティアに教えてもらっても、なかなか理解できません。そんな時、食堂スタッフで、元学校の先生が、ふたりの理解度に合わせて説明してくれました。すると、アキラ君は、「先生、わかった!」と大変喜び、それ以来、学習に対する意欲も湧いてきて、「これ宿題なんだけど教えて」「今日は数学がわからないから教えて欲しい」など、自分から進んで学習するようになりました。同時に、今まで、男性＝性＝父親＝恐怖のイメージでしたが男性への恐怖心は薄れていきました。

役割を得ていきいきと活躍する親子

〈不安を感じている参加者の相談相手として〉

タナカさんは料理好きで、「このメニューすごく美味しい、どうやって作るのですか?」とキッチンに来てレシピをもらっ

たりするうちに、調理のスタッフとも仲良くなり配膳の手伝いや洗い物や片づけを頼まれ、スタッフとも笑顔で話をできるようになりました。

また、タナカさんは、新しく参加した母子がボツンとしていて声をかけたり、話し相手になり、自分の経験から不安な気持ちに共感し、不安そうにしている母親とボランティアとの間を取り持ったり、間に入って調整をする役割も担っています。

〈褒められる、認められる経験〉

アキラ君、カオルさんは、食堂のある日は、朝の荷物の運搬、会場準備を手伝います。赤ちゃん連れの親子を見つけたカオルさんは、「私が赤ちゃん抱っこしてるから大丈夫だよ」と赤ちゃんの見守りをかけて出ます。

アキラ君は、幼児の遊び相手、片付けまで積極的に手伝うようになりました。ボランティアや参加者から「ありがとう」「がんばってるね」と褒められ、認めてもらえたことにとても満足しているようです。

また、中学3年間サッカー部で練習を続けました。小学校ではサッカーをする機会すらなく、一番下手でベンチ入りもできなかったのですが、休まず続け、最後の試合は、ベンチ入りもできたそうです。高校生になりアルバイトも始め、子ども食堂の手伝いはできなくなりましたが、進路を考える時期となり、資格が身につく専門学校への進学を目指しています。

支援による変化

エンパワーされたこと

〈対人関係〉

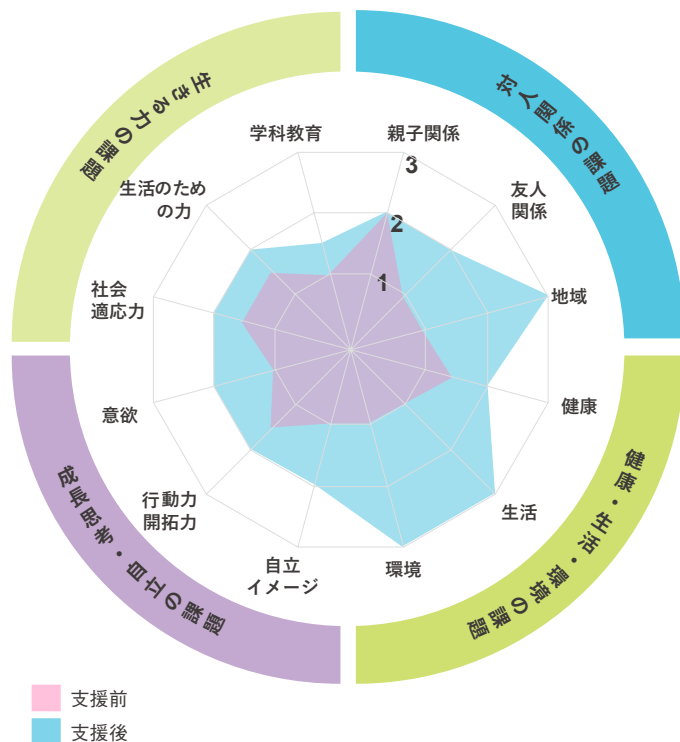
施設退所後、地域では知り合いも少なく、不安を抱いていましたが、子ども食堂に参加することで、多くの人と出会い地域とつながる機会となりました。

〈生きる力〉

食堂運営スタッフ、学習支援のボランティアなど信頼できる大人との関係のなかで、人と共に食事作りをするなど生活の楽しさ、学び理解することの喜びを経験して、学習することや将来を模索する意欲が生まれました。

〈成長思考・自立〉

親子とも、食堂での役割を持つことで感謝され自己肯定感が育ちました。アキラ君は施設では暴力的で暴言もひどく荒れていましたが、さまざまな人との出会い、役割を持



つことで、「ありがとう」「何か手伝いますか？」など本来のやさしい心を取り戻し、部活もあきらめずに続ける意欲や根気が育ちました。

〈残された課題〉

荒れた家庭の中では小学校から学習する状況ではなく、基礎的な学力が身についていないため、学年相当の学力には到達しておらず、進学や将来の職業選択など選択の幅が狭められてしまうだろうと感じています。

ヒアリングを終えて

今日の福祉政策は施設での暮らしではなく、誰もが自分らしい暮らしができる在宅生活を基本としています。しかし、長い期間施設生活が続き、地域での自らの生活イメージが持てなかったり、地域での暮らしに具体的な不安や恐れがあれば、地域での生活移行にブレーキがかかることは容易に想像がつかます。本事例の活動リーダーKさんは、そんな当事者や子どもたちのことをよく知る人で、前向きな地域生活を送れるよう見守り、支えています。

Kさんは、地域生活に不安を持つひとり親家庭にとって安心できる居場所提供を前提に、支援目標を、ひとり親世帯の自立としています。食事や生活用品等の支援を受けつ

つ、居場所で様々な人たちと関わり、対話し、時に、共に活動し、その楽しさや喜びを享受しながら、情報や知識と共に心の安定を得て、確実な自立生活が送れるようにと考えています。

貧困、虐待、DVなどの問題を抱える家庭で育つ子どもたちは、生活の中で培われる生活体験や文化的な思考、自然体験などが不足しており、子ども食堂の中で、それらの体験ができるように工夫しています。子ども食堂で提供する食事作りをボランティアと家族が一緒にすることもそうした考え方から行っています。

公共施設の一角を借りて行っている子ども食堂は、コロナ禍、場所の貸し出し中止をはじめ様々な制約がありました。お弁当はテイクアウト、食料や生活用品のパントリー、参加者は密を防ぐために2部制にし、何より参加の機会を失わないことを第一に実施しています。

一方で、コロナ禍、居酒屋チェーンやピザチェーンなど、新たなつながりも生まれました。店員のお兄さん、お姉さんがいてくれると会場にパワーがあふれ、参加者が元気になりました。居酒屋の店長は「こうした取り組みは、食事を提供するだけではなく、大人も子どもも笑顔にすることが大切なことに気づきました。何より私たちが元気をもらいました」との感想。また、食材を寄付してくれた西日本の小さな島の方々とオンラインでつながり、子どもたちと食育で交流することもできました。

子ども食堂の活動が、ひとり親世帯の親子を支えているだけではなく、仲間と共にやりがいを持って取り組むボランティアを育て、福祉事業に関係する機関ばかりではなく民間にも、その輪を広げています。活動の柔軟性と継続の力は、ひとり親世帯に限らず、地域を元気にする活動になっています。

コラム



人のつながりと 安心できる居場所の大切さ

認定NPO法人横浜メンタルサービスネットワーク

理事 精神保健福祉士 森川 充子さん Mitsuko Morikawa

9/19 朝NHKラジオ深夜便で湯浅誠氏（NPO法人全国の子ども食堂支援センター理事長）の話を偶然聴きました。「子ども食堂はおそらく2012年に1か所目ができ…今全国でおよそ5,000カ所ある。そして実は子どもだけでなく様々な人たちの居場所。地域でつながりをつくる場所になっている」とのこと。

この事例の主催者は食事提供をし、人とのつながりを作るだけでなく、特にひとり親世帯の自立という支援目標をもって運営しています。居場所の提供と心配りや工夫ある関わりは、母親や子どもにとって大きな安心感を与え「自分はここにいていいんだ」という自分の居場所になっていきます。そして人との信頼関係が作られ、時間の経過とともに心に余裕が生まれ、今度は自分が周りの人に積極的な関わりをしていく行動につながります。それがさらに周りとの良い関係を生み、自信が芽生え、いつしか自己肯定感を高めることにつながっていきます。心が傷ついていても地域に自然な形で寄り添う人がいて、このようなプロセスの

中で時間をかけていくことで回復に向かうことが示されています。

私は以前仕事で精神障がい者の生活支援をしてきました。支援する中で母親が精神障がい者である母子家庭が数件ありました。福祉サービスの利用で何とか生活はまわっていくものの、母親は地域では孤立していました。小学生でヤングケアラーとしての役割を担っている子どももいました。確かに慣れると支援者がいる時間だけは、子どもらしい時間が持ててはいました。しかし、ただ個別にサービスが入るだけでは健やかな子どもとしての成長や地域での孤立による不安定感は解決できません。

私も法人では、精神障がい者や心に不安のある若者の居場所を運営しています。その中で、彼らが少し回復した後、地域でボランティアを始めた時の生き生きとした表情は忘れられません。安心できる場所での人とのつながりこそ心の回復に向かう大きなきっかけになります。

Case 6

学童保育

「自分の気持ちを伝える」
「人と気持ちを共有する」
生活の場（学童保育）がそれを育む

事業所のプロフィール

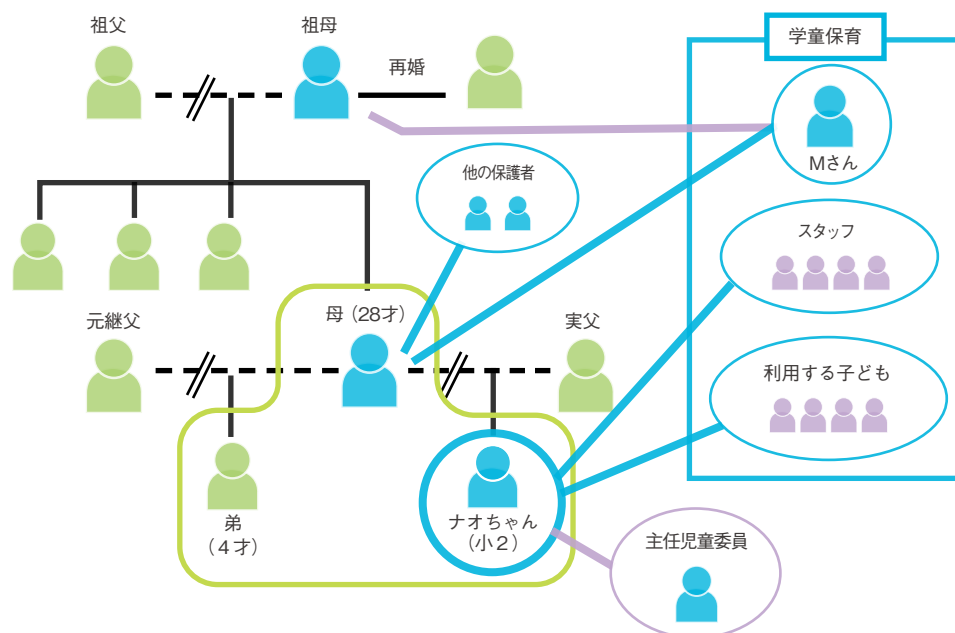
活動種別	学童保育
活動地域	横浜市
活動開始年	2020年4月～
活動場所	借家
活動日	平日放課後・学校の長期休業日の日中
参加者数(平均)	15人前後
参加費	月額15000円（延長保育等別途）
主なネットワーク	小学校、子ども家庭支援センターほか

共働き家庭やひとり親家庭の増加等を背景に、保護者が昼間家庭にいない児童に適切な遊びや生活の場の必要性が高まり、政府によって、2014年、「放課後子ども総合プラン」が策定され、放課後等、子どもたちの安全で健やかな居場所づくりが市町村ごとに推進されることになりました。しかしながら、本プランで示される居場所には所管の異なる2つがあることはご存知でしょうか。

放課後子ども教室 【管轄：文部科学省】	すべての子どもを対象として、安全安心な子どもの活動拠点を設け地域の方々の参画を得て、学習やスポーツ等、地域住民との交流活動等の機会を提供する取り組み推進	地域の協力者等
放課後児童クラブ（学童保育） 【管轄：厚生労働省】	共働き家庭など留守家庭の概ね10歳未満の児童に対して、放課後適切な遊びや生活の場を与えてその健全な育成を図る（児童福祉法第6条3第2項に規定）	放課後児童指導員（専任）

本事例は、旧公団内の学童保育で、20年以上指導員として勤務するMさんが、多様性が高まる子どもたちの生活課題に寄り添う中で、集団では対応しきれない、個別に寄り添う必要がある子どもたちの存在に気づき、新たな子どもたちの「生活の居場所」を確保したいと新たな学童保育を立ち上げたものです。住宅地の中の戸建て住宅を借り受け、より「小規模」に「家庭的」に子どもの「生活の場」とし、子ども、また保護者を支える場であらうとする取り組みです。

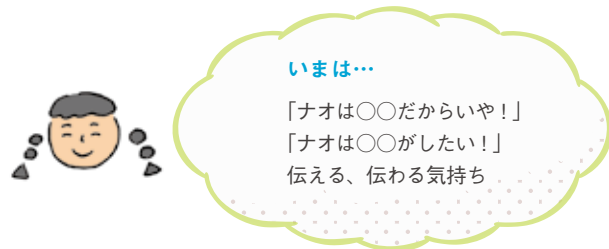
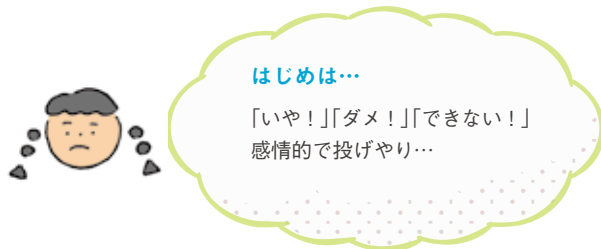
PROFILE



ナオちゃん（仮名）（小2）は、シングルマザーの母親（28歳）と、母親の再婚相手の子どもである異父兄弟の弟（4歳）との3人暮らし。祖母の所有するマンションで暮らし、母親は病院の看護助手をしています。

ナオちゃんはコロナ禍の昨年4月に小学校に入学しましたが、4～5月は休校で6月から学校再開となり登校が始まりました。しかし、一人で登校することができず、母親と一緒に登校するも母親から離れませんでした。

ナオちゃんの母親は、自らが小学生の時通っていた学童保育の指導員であるMさんが、新たに小規模の学童保育を立ち上げたことを知り、「Mさんが居るなら子どもを預けたい」と開所したばかりの学童保育を訪れ、ナオちゃんを預けることにしました。



支援のプロセス

Mさんは、地域の学童保育に25年携わり、子どもが育つ家庭や保護者、また、子ども自身の育ちのプロセスに発生する課題が、複雑、多様化していると感じていました。そして、そうした子育て家庭や子どもたちを見守っていくためには、「おかえり」「ただいま」と迎える場、静養、おやつ、宿題、昼寝、大人との会話、遊び、地域に出かけていく遊び、塾通いなどが当たり前に行ける「生活の場」が必要と考えていました。

ナオちゃんのお母さんのこと

ナオちゃんの母親は小学校入学時より、Mさんが、かつて勤務していた学童保育に通っていました。卒業後も道で会えば、子どもとも保護者ともちょっとした立ち話をしたりする関係は続きます。この母親やナオちゃんの祖母であるおばあちゃんともMさんは緩やかにつながっていて、自らの近況を打ち明けてもらっていたことで家庭の事情を理解していました。

母親も母子家庭で育ち、入学当時はおとなしい女の子でしたが、ヤンチャな兄たちの影響もあったのでしょうか、言葉が乱暴で、関係性を築いていくことができず、友達付き合いが難しい子どもでした。20歳でナオちゃんの父親である男性と結婚。夫は子育てには興味が無く、次第に夫婦関係が悪化します。ナオちゃんが2歳の時に離婚。24歳でアルバイト先で知り合った男性と再婚。しかしながらナオちゃんの弟を妊娠中に2度目の離婚。関係性のもつれを話し合いの中で解決していくことは大切ですが、ナオちゃんの母親は、子どもの頃からそうしたことが上手ではありませんでした。感情的、投げやりな気持ちになってしまっ、関係し続けることを諦めてしまったのかもしれません。

地域の主任児童委員も心配したナオちゃん家族

親子3人で暮らしはじめたナオちゃん家族と同じマンションには主任児童委員が住んでいました。シングルマザーへの支援というきっかけで、ナオちゃん家族と関わり始めました。主任児童委員は、Mさんの知り合いでもありました。母親の

ナオちゃんへの乱暴な言葉遣いや温かみに欠ける対応が気になりましたが、関係性を作っていくためにも、注意などはせず、近所のおばちゃんとして様子を観ていこうと思っていました。そして気になることはMさんにも話していました。母親には母親の生きづらさがあることを周囲も気づいていました。

母親は就労のため、ナオちゃんを3歳から保育園に預けましたが、ナオちゃんは先生や周囲の大人とは話をしない場面緘黙の症状がみられ、その保育園を退園してMさんの学童保育の系列である小規模保育園に転園しました。

コロナ禍 ナオちゃん小学校入学

2020年4月、ナオちゃんは小学校に入学しました。しかし学校は3月から5月までは休校。お母さんは、仕事をつづけるために、学童保育を利用することが必要です。

2020年4月、Mさんの学童保育もプレオープン。それを知ったナオちゃんのお母さんは「Mさんがいるならナオを預けたい」と入所を希望しました。しかし、開所当初は週に2日間だけの試験的な開始のため、他の日は放課後子ども教室（放課後キッズスクール）を利用するしかありません。しかしナオちゃんは放課後子ども教室の様な大きな集団にはなじむことができず、利用できない時は母親が仕事を休みました。

学校が再開しても、ナオちゃんは一人で学校に行くことができませんでした。母親に促されてなんとか家を出て学校に向かいますが、母親の手を放さず、学校に着くと下駄箱で1時間ストライキ、見かねた担任の先生がナオちゃんの手をつなぎ、泣きながら教室につれていかれるという毎日が、分散登校の6月末まで続きました。

母親とナオちゃんを支えるための登校支援の開始

この事情を知ったMさんは、「このままではナオちゃんは不登校になってしまう。お母さんのストレスも大きく、子どもへの対応もより悪化することが予想される」と危惧し、「私が、朝の1時間足らずなら協力できる」と考え、7月からナオちゃんの朝の学校への送迎を引き受けることにしました。Mさんは、ナオちゃんが「学校には行きたくない!」とどんなにぐずっても「学校に行きます」「ママはお仕事があります」

とナオちゃんの手を引いて歩きます。途中で「おうちに帰りたい!」と泣き地団駄を踏んでも、「行くしかないよ」と諭し、また「あと〇日頑張ろう! そうしたらお休みだよ!」と励ましながら、時間をかけて学校に向かいました。母親もナオちゃんを励まし、ある時は途中まで付き添うなど努力しました。

最初は教室までMさんが付いていきましたが、次第に下駄箱で上履きに履き替えさせてバイバイ、次は上履きには自分で履き替える、など少しずつ手をかける時間を少なくし、距離をとるようにし、なるべく自分でやれるように見守ることに徹しました。

3月頃からは、少しずつ離れて登校できるようになり、どこまで送るのかを母親と相談しながら途中で見送るなど、徐々にナオちゃんが一人で登校できるような付き添い方を続けました。4月になるとほぼ一人で登校できる日が多くなり、離れて見守るMさんに「何で付いて来るのよ!」「もう付いてこないで!」などと言ったりもします。今、なんとかナオちゃんは、不登校にならず、学校生活を続けています。

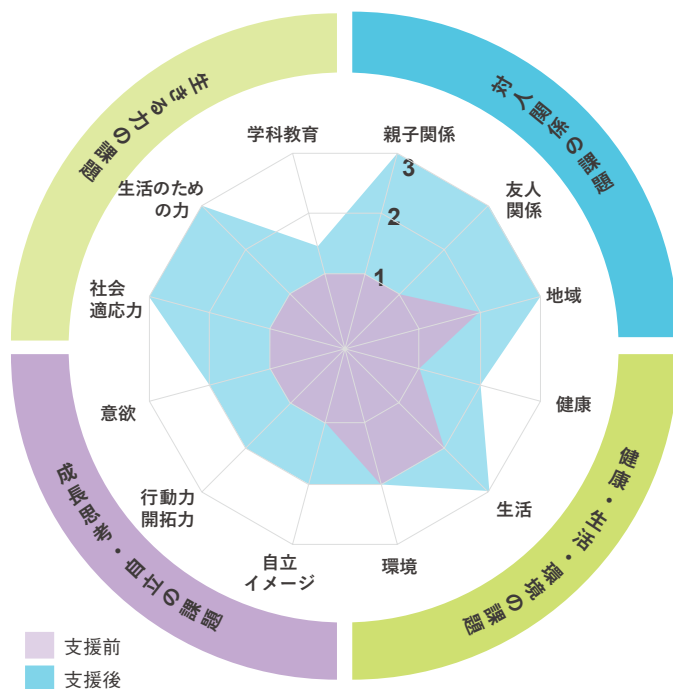
登校支援は、学童保育としての支援ではないのですが、「生活の場」を提供する取り組みを継続しているからこそ、子どもの支援だけではなく、家庭の支援（保護者の支援）の必要性があるケースもあります。また、子どもにとっての親以外の信頼できる大人の存在になることは、関わりの中で育つものだとすると、こうした毎日の関わり、もっと言うならば、ナオちゃんのお母さんも含めた緩やかだが連続した信頼関係を築くことが必要だと感じています。

戸建て住宅の小規模学童保育で育つナオちゃん

2020年8月、小規模学童保育は正式に開所しました。閑静な住宅街の一角、子どもたちのために使って欲しいという家主のご厚意で借り受けた、2階建ての広い戸建てです。

毎日、5～10人の子どもたちが通ってきます。学校にひとりでは行けなかったナオちゃんは、最初は学童保育に来て母親と離れることができませんでした。戸建てのアットホームな環境に安心感を覚え、次第に一人でも過ごせるようになりました。指導員やボランティアといることが多かったナオちゃんが、秋ごろになると友達とも遊べるようになりました。

「人との関係が築けないのは、自分の気持ちを伝えることができないから。」Mさんは、そう考えており、嫌だったことを聴いたり、やりたいことなどをスタッフに伝えられるよう促したりするようにしたところ、少しずつ、自分の気持ちをその場で言えるようになりました。また、生活習慣では、宿題に



取り組むことが、きちんと習慣化したのもとても進歩したことです。他の同学年の子どもと比べれば、学力や基本的な生活技術などに遅れは感じますが、指導員や、毎日一緒に遊ぶ友達の中で、ナオちゃんなりに少しずつ成長してきているとMさんは感じています。

母親の変化

母親はナオちゃんが学校に行かないことで、度々欠勤することが多く不安定な就労でしたが、ナオちゃんが登校できるようになり、看護助手として働き始めました。学童保育のスタッフの勧めや、同じ学童保育に通っている保護者などから話を聞き、今後はヘルパーの資格を取り、介護福祉士を目指そうかとも考えているようです。

母親の子どもへの対応も少しずつ変化をみせています。Mさんは、乱暴な子どもへの態度を注意するのではなく、学童でのスタッフのナオちゃんへの対応の様子を母親に見せていくことで、子どもに対して怒ったり命令したりするのではなく、受け止めていくことの大切さを伝えています。母親も連絡帳にもナオちゃんの生活の様子を記述するなど、子どもの様子をよく見るようになってきたと感じています。

支援による変化

エンパワーされたこと

〈対人関係〉Mさんが登校支援をすることで、母親のストレス

も軽減され、子どもも母親への依存が少なくなりました。学童保育という地域での安心できる居場所を得て、その中で友人との関係も育まれました。
〈生きる力〉Mさんの支援で不登校という状況にならずに済

み、また学童保育での体験や人との交流を通して生きる力を得ることができました。
〈健康・生活・環境〉母親が就労を続けることができるため、経済的にはやや安定しました。

ヒアリングを終えて

Mさんには、長年学童保育に関わる中での、子どもや家庭の変化、地域社会の変化について、また、地域で、子どもや家庭にどんな支援が必要なのか、お考えを聞かせて頂きました。

学童保育の運営は容易ではありませんが、以前は親も子ども地域とのつながりがあり、保護者は、子どもが健全に育つ場である学童保育を指導員と共に守ろうとし、主体的に運営委員をするほか、バザーなども行って資金を生み出すことも行っていました。

時が経ち、共働きは特別なことではなく、ひとり親の家庭も増加するなか、放課後の子どもを支援する法制度の整備は進んでいますが、地域の保護者達の主体性は薄れています。個人や世帯の問題が大きくなりすぎて、保護者の連帯意識も持ち

にくくなっているのかもしれませんが。だからこそ、本事例からは、単に「居場所」を与えられるだけでは、子どもの育ちや自立を守れないのではと改めて考えさせられました。

Mさんのこだわりは、子ども達にとっての「生活の場」の提供。子どもたちが特定の大人（指導員）と共に長い時間をかけてお互いにわかり合いながら共に生活を創っていく。指導員は子どもの身近に居る安心して頼れる大人になり、子ども同士は、昼間の兄弟のような親しい関係をつくっていかうとしています。

6年間の小学校時代。その間にいかに愛され守られ生き生き楽しいことをいっぱいするかが大切。そして学童を卒業してもつながってられる、子どもや保護者の「しゃべり場」も必要になっており、親子を見守り合う場を創りたい、と更なる抱負も語って下さいました。

コラム



「線」を伸ばす、「線」に応える地域

共育のひろば 主宰 牧岡 英夫さん
Hideo Makioka

右図のように人の育ちを眺めてみました。3色のラインは、育つうえでの周囲の人々との関係「線」と考えます。

初めは親との関係、近所の友だち、幼稚園、小学校などの「場」でのつながりを表しています。「線」は成長と合わせて、次第に遠くに、生活圏の広がりと並行して伸びていきます。身近な周辺だけの「青色線」は、中学生から青年期には「黄色線」のように伸び、成人し就労、育った地域から転居などにより、「赤色線」のように更に周囲に伸びていくのです。

しかし暮らしに危機が起これば、「線」は外からの力で断たれたり、自ら「線」を断ち切ることもあるでしょう。「赤色線」「黄色線」は少なくなり、更に「青色線」も失われていくことになります。人々は、互いにこの「線」を出合わせ、絡ませながら日々の暮らしを重ねていると考えてみました。

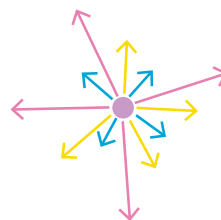
ナオちゃんのママは、「黄色線」から「赤色線」に暮らしの「線」

を広げていく中で、危機に出合い、「線」を伸ばすことが難しくなりました。「線」が閉ざされていく中で、Mさんとの「青色線」は、残っていたのです。Mさんにも「青色線」は、残っていました。周囲の人々からの伸び

ていた「線」は、一方通行でも「気になるなぁ」と残っていることは少なくありません。「青色線」でMさんにたどり着いたナオちゃんのママに、Mさんが双方向「線」になるよう応じました。そしてその線が太くなっていくように、寄り添います。

「線」がいくつもあり、また太さがあって、それらを感じ合える「場」こそ「暮らしの場」であり、「地域」なのではないでしょうか。ここでは学童保育でした。もつれたり、断ち切ったり、断ち切られたり、しかし「線」は、全く消えてしまうことはないように思います。「気になるなぁ」「どうしているのだろうか?」「姿が見えないけど」というように。

「線」を安心して伸ばすことができる広さ（生活圏＝地域）、伸ばした「線」に太さを持って応じてくれる安心（応答関係）の意味をナオちゃん、ママ、Mさんから思い当たりました。



Case 7

子ども食堂

子ども・若者を支える意識の共感と
連帯性が子どもと地域を育む

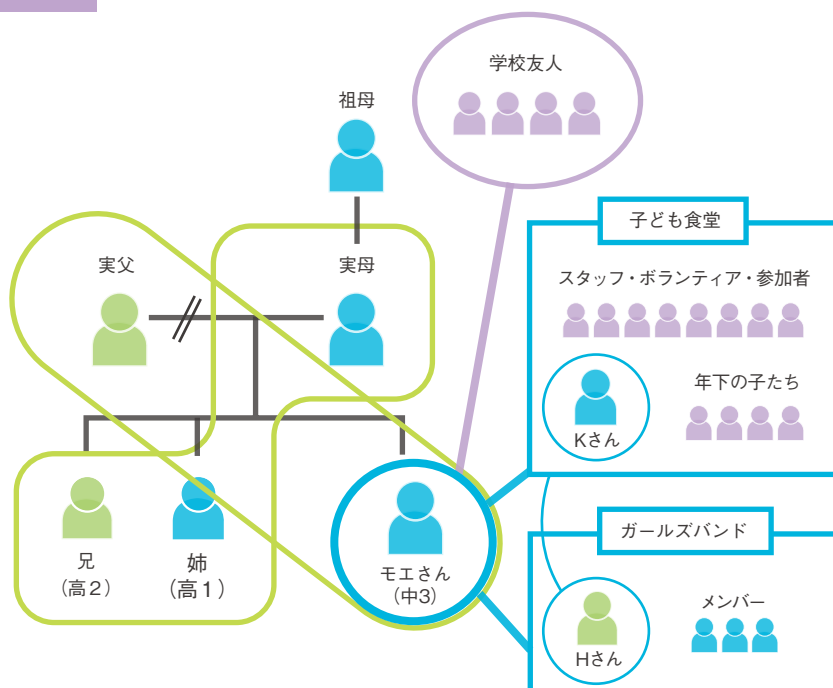
事業所のプロフィール

活動種別	子ども食堂
活動経歴	逗子市
活動開始年	2016年～
活動場所	小学校、コミュニティーセンターほか
活動日	各会場で月1回
参加者数(平均)	月に合計 300人(コロナ禍では弁当50個)
参加費	子ども無料/大人300円
主なネットワーク	教育委員会・子育て支援・市民協働課・住民自治会・地元商店

私たちが暮らす多くの地域に、「自治会町内会」が組織化され、地域住民相互の親睦や人権の尊重、連帯意識の中で地域の諸課題解決を行い、住みよい地域社会づくり活動を行っています。2018年4月、全国には296,800の自治会町内会があるとされています。(総務省自治行政局住民制度課) また、こうした組織から、厚生労働大臣の委嘱を受け、地域福祉増進のための活動を行う「民生委員」が選任されています。民生委員は、児童委員を兼務しており「民生委員・児童委員」と呼ばれ担当地域を持ち、地域住民の見守りや必要な支援を行うこと

で地域福祉の推進を担います。更に、「主任児童委員」については、児童委員の中から選任され、児童福祉に関する事項を専門的に担当する民生委員・児童委員で、地区担当の民生委員・児童委員と連携・協力して、様々な児童問題について取り組んでいます。本事例は、長年、民生委員、主任児童委員を務め、自治会町内会、学校、行政、社会福祉協議会など、地域の社会資源やキーパーソンとのつながりを大切に、子ども・若者の課題を掴み、地域で支えるために連携・協働によって解決を図ろうとするキーパーソンの取り組みです。

PROFILE



中学3年のモエさん(仮名)は、兄、姉と両親の5人家族。母方の祖母も隣の市に住んでいます。両親は、父親の経済観念が原因でモエさんが小学生になった頃から別居状態が続き、中学2年の時に離婚が成立しました。母親は、育児能力が乏しく、姉は療育手帳を所持しています。離婚をきっかけに、母親が兄と姉を連れて隣の市に転居。モエさんは父親と二人暮らしになり、時々、母や兄、姉に会いに行く生活をしています。

モエさんが幼児の頃より、民生委員、主任児童委員を務めるKさんは、この家族と子ども達を気にかけて、見守っていました。

支援のプロセス

子どもにとって家庭・学校以外の「居場所」についての気づき

主任児童委員のKさんは、小中学校の評議員など地域の子どもを見守る役割も担っています。モエさんは、Kさんにとって特に気になる子どもです。モエさんがKさん宅を訪れるこ

ともあり、そんな時は、ゆっくりした気持ちになれるよう配慮して話を聴きました。こうしたことから、Kさんは、「子どもにとって、安心できる居場所が必要」「自分の気持ちを、時には家族以外の誰かに伝えられる場が必要」と考えるようになりました。5年前、Kさんは主任児童委員の仲間とともに子ども食堂を立ち上げました。家庭が安心できる場ではないモエ



学校では
テメー！コノヤロー！



食堂では
小さい子たちと遊んであげるね
ガールズバンドでは
ボーカリストやりたい！

さんのような子どもは、他者に大切にされる、他者に認められ自信を持つなどの経験が薄く、目の前の困難に立ち向かうエネルギーを十分備えられていないと感じていました。

Kさんは、食の支援という形をとる中で、生きづらさ、育ちづらさを抱える子どもを受けとめ、子ども達の生きるエネルギーや自尊心を養いたいと考えました。

安心できる居場所＝子ども食堂に

月一回の子ども食堂は、誰でも参加できます。モエさんを含め、是非、来て欲しい子ども達が地域に数人いて、そうした子ども達には、直接声をかけるようにしました。モエさんには、「小さい子たちが喜ぶから手伝って」と頼み、実際、モエさんは優しく子ども達の遊び相手をしたり調理を手伝ったりしています。コロナ禍の今はお弁当の配布のみですが、モエさんは、毎回顔を見せています。

モエさんは両親が別居状態だった小学校時代、不登校気味でした。中学校に通う今も精神的には不安定で、時々学校で暴言を吐いて人を罵ったり、暴れることもあると聞いています。しかしKさんの前で暴言を吐くことは一度もありません。Kさんと一緒にいるとき、子ども食堂にいるときは、気持ちりが穏やかでリラックスできており、そんなモエさんの時間を大切にしようとKさんもスタッフも想っています。

ロールモデルにならない両親の中で育つ思春期の葛藤

両親の離婚後、モエさんは父親と暮らしています。父親が好きなモエさんは、父親のことを「カッコいいでしょ」と自慢します。父親が仕事に出るときには、持ち物の確認など世話を焼くようなこともします。しかし、父親は趣味の車に収入をつぎ込んでしまいます。

一方、母親と母方の祖母はともに現在交際中の異性について、高校生の姉も、同じ職場で知り合った男子と自宅で同居、母親もそれを黙認しています。モエさんは、実母の家庭に、家族とは違う複数の男性がいる状況や、彼らと共にいる母や姉にも嫌悪感を持ちつつも調子を合わせています。

Kさんは、モエさんが母や姉と心のつながりが持てず、物理的にも心理的にも孤独感を強くしていることを気にかけていました。また、思春期に入るモエさん自身が、淋しさや孤独感を強くする中で、信頼できる人間関係を築くことができ

ないまま、異性に依存してしまうことも心配しています。

多様な地域の人々が参画する子ども食堂である価値

Kさんの主催する子ども食堂は、大勢のボランティアが関わっています。Kさんは、地域の食を通じた健康づくりのボランティア活動団体の「食生活改善推進員」も務めており、活動の一つ「男性の料理教室」の参加者の有志が、調理や子どもの遊び相手や手作り野菜の寄付をしてくれています。一方、地域のボランティア希望の人には、「盛り付けのお手伝いだけお願いできますか？」など時間や作業もハードルを低くし、「役に立てた」喜びから交流が生まれています。

また参加している子ども達にも食育を兼ね、調理体験や配膳の手伝いをしてもらっています。結果、モエさんのような子どものボランティアから、学生、子育て中の人、高齢者等、幅広い年代の人たちが活動に参加し、交流が生まれ、地域の活性化につながっています。時には大学生のグループが参加し、全力で遊んでくれて子ども達の笑顔も輝きます。将来福祉の道に進みたいと熱く語る学生達には社会経験の場にもなっています。

Kさんやスタッフは、子ども達の様子に常にアンテナを張り、折に触れ「あなたが大事」「見守っているからね」とメッセージを伝えています。気になる子ども達については、小中学校と随時情報を共有しています。「モエさんが登校出来ているのは子ども食堂のお蔭」と校長先生に感謝されました。子ども食堂という居場所、そしてKさんやスタッフとの関わりが、モエさんの頑張りにつながっている事は、とても嬉しい事です。

様々な仲間の中で正しく人と関われる子どもを育てる

モエさんの幼馴染、同学年で同じ学区に暮らすワカナさん(仮名)も、Kさんが長年関わり続けてきた子どもの一人です。両親に愛情を注がれて育ってきたワカナさんですが、母、兄、そしてワカナさん本人に知的障害があります。性格は、内気で人に流されやすいところがあります。だから、強引に誘うモエさんにワカナさんが戸惑うこともしばしばです。

ある時ワカナさんがKさんに、モエさんと2人で町に出たときにモエさんが万引きをするのを見てとても困った、と打ち明けました。Kさんは、ワカナさんに、友達であっても、嫌なこと、間違いだと感じたことは言ってもいいし、悲しくなっ

たら泣いてもいいと伝えました。ワカナさんの自分の気持ちを相手に伝える力、受けとめる力を育てていかなければならないという思いからです。ワカナさんは「そうなの?」と言いながら少しホッとした顔を見せました。

一方、モエさんの万引きの疑いについては、学校等と情報を共有しました。地域では、本人に問いただすのではなく、「その服、誰に買ってもらったの?」とさりげなく聴くこともありますが、監視ではなく、見守られていると感じることで、問題を起こす抑止力となるよう対応することが大切と思っています。モエさん、ワカナさん、二人ともに、Kさんにとって、大切な地域の子ども。『あなたのことが大切だよ』『自分を大事にしてね』と言葉をかけ続けています。

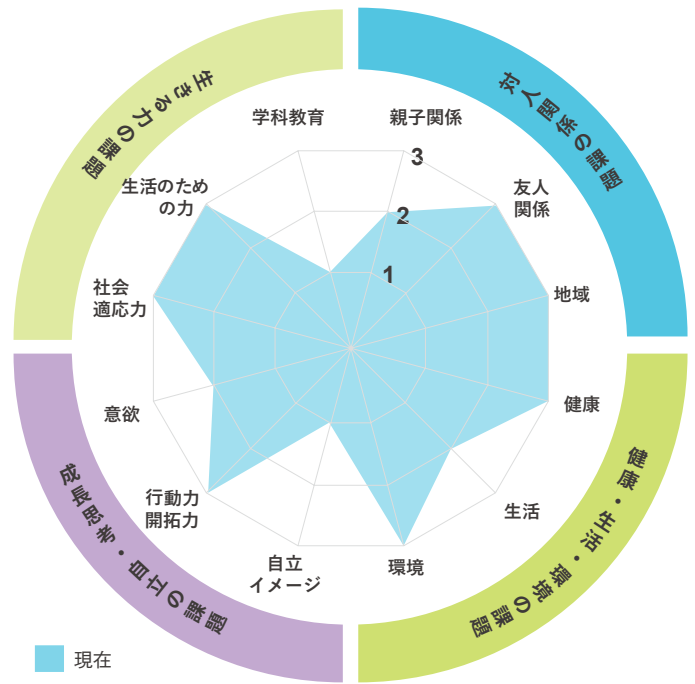
未来のための進路選択

モエさんは、生活スキルは身につけており料理や歌や絵など得意なことがたくさんありますが、教科学習は苦手です。不登校でもあったため、「欠席が多かったし高校への進学は無理かな」と気にしています。兄はアルバイトをしながら頑張って高校を続けていますが、姉はアルバイトはしつつも進学した通信制高校もきちんと続いている様子です。進路に悩んでいる素振りを見せていなかったモエさんですが、Kさんの前では悩みを隠しません。Kさんは、進学を希望するのであれば、通い続けるにあたってのリスク等も考えながら決めようねとモエさんと話しています。

地域の中で子ども食堂以外の居場所、自分が輝ける場

こども食堂には多くのボランティアが参加していることは前述しましたが、12人の子ども食堂スタッフが運営を支えています。毎月、学校で配布する案内チラシを作成しながら、ミーティングを行います。教育・福祉・医療関係や心理関係など専門的なスキルを持っているメンバーも多く、気になる子どもがいるとスタッフ皆で話し合い、対応を考えます。

新型コロナウイルスが広がり、思春期の子ども達も、することがなく時間を持て余していました。そんな時、スタッフで団体職員のHさんがKさんに、以前から自分が行っているバンド活動に子ども食堂の中学生を誘うことを提案してくれました。Kさんも大賛成。YouTubeなどで素人が作った曲やバンドが有名になっているのを知っている少女たちは「やってみよう、やってみよう」と早速、モエさん、ワカナさん、そして発達障害のある中1と高1の姉妹などでガールズバンドを作り、月1回の練習日を決めてスタートしました。



HさんもKさん同様、課題を抱える思春期の少女、少年には家庭、学校以外の地域に社会資源がないこと、居場所がないことを気にかけています。ガールズバンドの活動で、彼女たちが「何かに夢中になった、やり遂げられた」という経験が得られることには大きな意味があると考えています。Kさんも、モエさんたちのガールズバンドが今後地域のお祭りなどで人前で発表して、褒められたり認められたりすることで自信につながり、また地域の多くの人に認知されることによって、モエさんたちの地域での生活を見守る目、味方が増えればと考えています。

支援による変化

エンパワーされたこと

〈対人関係〉

子ども食堂、ガールズバンド、支援者との付き合いの中で、支援者やボランティア、同年代の仲間や小さな子どもたちといった幅広い年齢や立場の人たちと交流を持ち、家庭と学校以外での関係を広げています。

〈成長思考・自立〉

小学生のころに比べると不登校は改善し、暴言なども収まり、気持ちが安定しています。ガールズバンドも「やってみよう」と積極的に参加しています。また、最近では将来について悩む姿も見せ、自分の人生に少しずつ向かい合い始めています。

ヒアリングを終えて

本事例のこども食堂は、何回目かのヒアリングになります。子ども・若者の育ちや自立の支援についてご意見を伺ったこともあります。共に、どのように子どもや地域に対応していくことが必要なのか悩みつつ、Kさんは、地域や地域の子どもや若者の状況を明快にお応え下さいます。それは、自治会町内会活動、民生委員・主任児童委員活動、食生活改善推進員としての活動を通して地域との多様なつながりを持っており、過去から現在までの様々な情報をキャッチしつつ、どのように問題解決したら良いかを、ネットワークの中で、Kさんが、協働し続けているからだと思います。

身近な地域に困りごとを抱えたり、生きづらさ、育ちづらさを抱える子どもや若者が増加していることはわかっていても、実際、どこに、そのような子どもがいて、どのようにつながりを持つのか。それを掴むのは容易なことではありません。

福祉や医療等の専門機関であっても、窓口の相談に当事者が訪れるか、若しくは、大きな問題として顕在化するまで接点を持ちにくいかもしれません。また、学校も、子どもの家庭や地域での生活まで掴み切れない現状もあるでしょう。

そのとき、地域の様々な社会資源、地縁役員やボランティアによる発見機能が力を発揮します。必要と思われる新たな社会資源開発、日常的な見守りなど、地域だからこそ新たな取り組みを生み出すことも可能にします。

本事例も、既に発足5年目を迎える子ども食堂の事例ですが、実は、人口5万人強の市に新たな子ども食堂が次々と誕生し、現在5つになりました。いずれも多くのボランティアや参加者により運営され、更にその外側に、学校や地域の多様な組織やキーパーソンが取り巻き、子ども達を育てて行こうとしていることがわかります。子どもや若者に温かい眼差しを持ちつつ、共通の志と連帯性を持つ地域も、子どもや若者と同様、成長しているように思われます。

コラム



地域づくりのニューリーダーへの期待と可能性

宇都宮大学 地域デザイン科学部
コミュニティデザイン学科 准教授 石井 大一郎さん
Daiichiro Ishii

地域づくりに必要なリーダーとはどのような人でしょうか。自らの経験や知識を生かして何でも課題解決してくれるスーパーマンでしょうか。そうではないと思います。これからの私たちが暮らす地域に必要なリーダーの役割は、ニーズを知り、当事者を含めたキーパーソンが集い、対話をする場をつくり出すことです。

1960～80年代頃に急速に市街化した私たちのまちは、世代交代や家族形態の変化などにより、子育て中の若い家族、高齢のひとり暮らし、外国人など、異なる価値をもつ人が身近に住み合うまちとなりました。70歳代のリーダーが現代の子育て家族の困りごとを想像するのは簡単ではないし、その逆もまたしかりです。しかし、現代は、新しいニーズが広がっていて、それに対応するためには、地域内の協力関係を作り直し、それぞれが知る地域の資源や困りごとを共有する場を作り出すことが必要です。

今回の事例で紹介されている子どもの声は、地域の中の誰がキャッチできるでしょう。いきなり専門家が見つけることはできないし、制度サービスに結びつきにくいでしょう。子どもたちを、地域ぐるみで育てのだという視点を地域で再認識しなければなりません。そして、その支え手として、自治会町内会は力を発揮する必要

があるでしょう。子どもに対する見守りや助け合い活動として、どのような取組が必要なのか、子どもに関する活動を行う団体やボランティアとともに共有することから始める必要があるかもしれません。この時、ポイントとなるのは自治会町内会や民生委員は、自らが課題解決をしようとしません。子どもたちの存在を共有し、共に考えるつながり創りをすることが重要です。事例で紹介されている支援者であるKさんは、そうした対話の場を積み重ねています。

これからの地域力は、一つの団体や個人の強いリーダーシップのみでは向上できません。新しい現実に対応するためには、子どもたちや、子どもたちに身近に触れている民生委員、さらには学校や学童保育の先生などと新しいつながりをもち、情報を共有し、その上で、地域ぐるみで子どもを育てる目標を明確にするとともに、目の前のモエさん、ワカナさんを支える方法を議論することが大切です。2017年の社会教育法改正により地域と学校の協働活動を促進する「地域学校協働活動」が各小中学校でも始まっていて、地域ぐるみで子どもを育てる環境が生まれつつあります。筆者のオススメは、自治会や民生委員がコーディネーター役となり小中学校区のエリアで子どもに関わる活動グループや個人が一同に介する場をつくり、それぞれの活動の良さを再確認するとともに、モエさんやワカナさんのような子どもを事例として、お互いがどのように力を出し合えるのか、どのような活動が必要になるのかを、立場や経験に関係なく話し合う場をつくることです。本事例はその先駆けとなるような取り組みかもしれません。今後もこうした取り組みを応援していきたいと思っています。

Case 8

就労支援

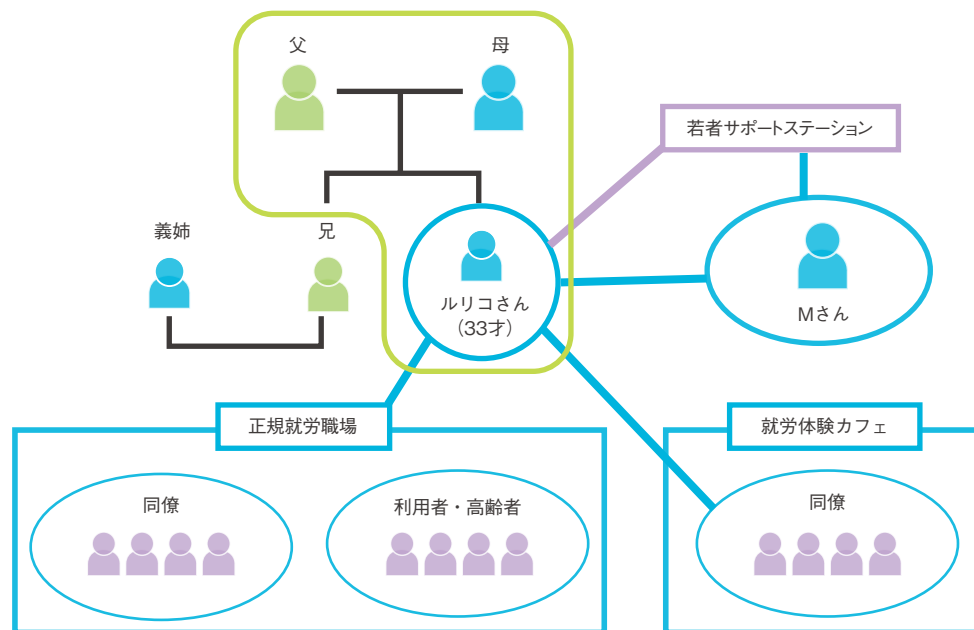
10年のひきこもりからの社会へ
働くことは生きること 職場は成長の場

事業所のプロフィール

活動種別	就労支援
活動地域	神奈川県全域
活動開始年	2016年～
活動場所	県内 100 事業所以上
参加費	無料
主なネットワーク	ワーカーズコレクティブほか

2019 年総務省統計局「労働力調査」で、15 歳～ 34 歳の若年無業者は、74 万人と報告されました。若年無業者は、＜求職型＞就職を希望していて実際に活動を行っている人、＜非求職型＞就職を希望しているが活動を行っていない人、＜非希望型＞就職を希望していない人の 3 タイプに分かれているといわれています。「働かない」「働けない」どちらの理由にも、「知識・能力に自信がない」「探したが見つからない」「希望にあう仕事がない」がありますが、3 つのタイプのなかで、公的支援が入る可能性があるのは「求職型」のみとなります。一方、ひきこもりの期間についての調査では、平均引きこもり期間 10.8 年。調査対象の 16% が 20 年以上に及んでいるという結果が出ており、ひきこもりの長期化・高齢化が課題となっています。本事例は、ひきこもり 10 年の若者が継続的な就労の実現に近づこうとしている支援例です。

PROFILE



33 歳のルリコさん（仮名）は、美術系自営業を営む父、看護師の母、兄の家庭に生まれました。経済的には裕福でルリコさんは何不自由なく育ちました。ルリコさんの兄は優秀で、両親の期待通り就職・結婚して自分の家庭を築いています。ルリコさんは幼少期から集団に馴染めず友達がいまいませんでしたが、父母は、そのことについてはあまり不安視することはありませんでした。母は、ルリコさんに、いつも身綺麗にしておくようにしつけ、両親とも、絵を描くことが好きだったルリコさんに絵の道に向かわせようとしていました。ルリコさんは、イラストレーション等に関心があり、高校卒業後はデザイン専門学校に進学しました。

しかし、専門学校卒業後、学んできたイラストの力で就職

することは難しく、一般事務等の仕事で、採用され入職しました。器量がよく身なりも整っているルリコさんは、事務職といっても、受付業務やお茶出しなど、接客の仕事を任されますが、ルリコさんは人と目を合わせ挨拶することすら満足にできません。職場の同僚とも上手く付き合えないし、お金の計算が苦手、遅刻が多いなど様々な要因で、仕事を続けられず、複数の職場経験をしましたが、いずれも長続きはしませんでした。その後、ルリコさんは求職しなくなりました。非求職型とも非希望型ともいえない状態で、あっという間にルリコさんのひきこもり生活は 10 年となりました。

そんな時、両親とルリコさんは若者サポートステーションに相談することになりました。



はじめは…

私はどこに行っても務まらない
採用面接なんてムリ



いまは…

毎日がんばって仕事してる
もっと給料があがればいいのになあ

支援のプロセス

ルリコさんの課題への気づき

若者サポートステーションは、働くことに悩みを抱えている15歳～49歳までの人に対して、就労相談・就活サポートをしています。ルリコさんの場合は、働く希望はあるが、継続して働くことのできる職場がない状況であると受けとめた相談員は、具体的な働く場を紹介する就労支援団体をルリコさんに紹介しました。

ルリコさんは、就労支援団体のMさんに「自分はどこに行っても務まらない」「何度も仕事を辞めることになって、もう、積極的に面接に行こうという気持ちにもなれない」と気持ちを訴えました。

この時、Mさんは、ルリコさんについて、表情が乏しく、暗い印象であること、また、Mさんと目を合わせようとしないことに気づきました。そして、今、なくてはならないこととして、人との関係を持てるようにすること、専門性を必要とする仕事でなくても、責任を持ってやり遂げる自己管理能力を備えていくことが必要であると思いました。

働く人が身に着けるべき意識とスキルを得る

ルリコさんはカフェで週3回、3か月の就労体験をすることになりました。

Mさんは、ルリコさんに、直接、仕事をするうえで意識して行って欲しいことを伝えました。

- 1)決められた時間に遅れることなく出勤すること
- 2)職員やお客さんに挨拶をすること

ルリコさんは努力しました。これまで前職で遅刻を繰り返してきたのは、時間にルーズというより、「家から職場まで、何分かかかるから、何時に家を出れば間に合うか」といった逆算がとても苦手だからということもわかってきました。通勤時、様々なアクシデントがあることも考えての逆算も必要になること等、丁寧に理解できるよう促して、通勤を重ねるうちに、遅刻せずに通えるようになりました。

挨拶についても、Mさんを始め、働く仲間の人たちから、ルリコさんに挨拶をし、ルリコさんにも挨拶を促す中で、次第に、気持ちの良い挨拶ができるようになってきました。

ハードルが高い？期待に応える喜び理解

カフェの仕事に慣れてきたころ、ルリコさんの得意の絵を活かして、メニューの作成をすることになりました。この作業も計画的に、作成期限を守って行うよう伝え、ルリコさん自身で作業計画をたて、作業の進捗状況についても連絡するよう促しました。こうした仕事の仕方は初めてでしたが、自分の好きなことを仕事で行うことができることについて嬉しそうでした。

しかし、残念ながら、この仕事は、計画的に作業を行い、期限までにやり遂げるということはできませんでした。できなかったということだけではなく、ルリコさんには、期限が守れないことで、他の人に迷惑がかかること、ルリコさんに期待した人が残念な気持ちになることなど、自分の行動が周囲の人にどのようなマイナスの想いを持たせることになるかなどの想像力が非常に乏しいことが浮き彫りになりました。

それでも人の関わりの中で働くことで成長

カフェでの就労体験終了後、就労支援団体の関係機関である高齢者福祉施設が通所施設を開所したため、Mさんのすすめでルリコさんは、はじめて正規職員として事務職員として勤務することになりました。

平日週5日、一日8時間の仕事です。出勤までの行動をルーティン化することで遅刻せず電車通勤しています。Mさんの計らいで、事務仕事の他に、高齢利用者のアクティビティ「絵手紙」の講師を務めたり、利用者のサークル活動にもサポートで入ったりと、人と関わる機会を与えられています。

今、ルリコさんは、Mさんと目を合わせ、楽しく世間話もできるようになりました。「Mさん、私ね、美味しいパン屋さん見つけたんだよ。カレーパンがおすすめ！」最近のルリコさんの話です。

周囲への影響の予測、周囲への配慮を学ぶ

ルリコさんは、見通しを持って行動することが苦手なのに加え、周囲の人の感情や迷惑がかかることに思いが至らず、課題認識ができていません。Mさんは、ルリコさんの、そんなマイナスの場面に遭遇したら、直接、指摘したり、ルリコさんに、何が起きているのか考えさせたりしています。「一定

の継続はできているものの、今のままでは、いつ、また仕事を辞め、ひきこもってしまうかわからない」Mさんはそう思っており、だからこそ継続的にサポートしていく必要があると考えています。周囲の人への影響を予測したり、慮ったりできなかったことが仕事をする人として、どのようにマイナスなかも認識できる仕事をあえて経験するようにすることも大切と思っています。

一人ひとりのももとの特性と、努力により改善できる可能性とを見極めて、自分から人に頼れる力も身につけつつ、頼ったり甘えたりばかりでなくまわりと協調することも必要と本人には根気強く伝えていく、それをMさんは大事に考えています。

人としての価値、仕事の価値に揺らぐ

そんな時、Mさんにルリコさんが思わぬことを言いました。「あなたの給料は、いつまでも少ないのね。お兄さんとは段違い」と家族に言われたと。そして、「もっと給料の良い仕事に転職したい」と。

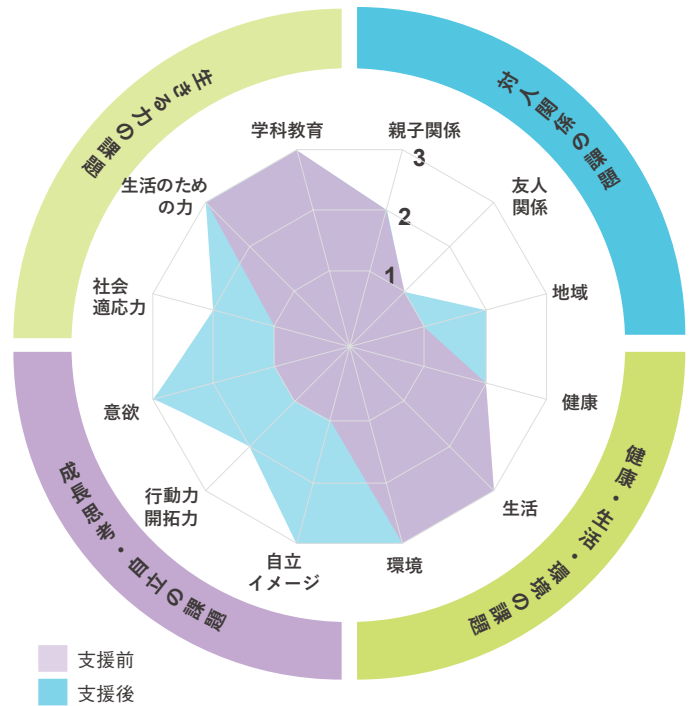
Mさんにとって正職員として採用されているルリコさんの給与は、10年のひきこもり後の仕事として、決して安すぎる給与とは思いませんでした。ルリコさんが就活する気力があってチャレンジしても、まだ、課題が様々あるルリコさんは、元に戻ってすぐに退職してしまうこともあるだろうと思いました。

しかし、Mさんはルリコさんに「もっと高い給与がもらえる仕事をさがしてみたら？就職試験にチャレンジしてもいいと思うよ」と言いました。ルリコさんが、新しい仕事と今の仕事を比較できたら良いと思います。

支援による変化

- ルリコさんは、
- ・人と目を合わせない
 - ・挨拶が出来ない
 - ・表情・感情に乏しい
- といった対人関係の課題や、
- ・時間管理ができず、遅刻や提出期限などルールが守れない
- 更に、規範的なことが守れずに他者に迷惑をかけるようなことがあっても、他者の気持ちを慮ることができず、
- ・反省しない
 - ・他者が自分をどう思うか関心がない
- から、集団の中で良好な関係性を他者との間に築けませんでした。

レーダーチャートにある「健康・生活・環境」また学力の点ではルリコさんに問題はありませんでした。が、対人関係が非常に限られ、時間管理や考え方の柔軟性などの学業成



績には表れなくても社会人として「生きる力」、将来に見通しを持ち前向きに行動する「成長思考・自立」の分野に課題がありました。

ルリコさんはMさんの支えにより、引きこもりの状態から就労体験を経て正職員としての就労を果たし、遅刻をしない、挨拶をするといったスキルはルーティン化することで徐々に身に付きました。学生時代に友達が一人もできなかったルリコさんですがMさんとは世間話もできるようになりました。このように「対人関係」「社会適応力」そして「成長思考・自立」の分野で課題が改善してきたことがわかります。

一方で、ルリコさんのももとの特性であるこだわりの強さ、見通しを持ったり他人の心情を慮ったりすることが苦手な部分は課題として残っており、自己覚知もまだまだ未熟です。Mさんだけではなく頼れる相手を広げ、まわりの人のフォローを得ながら仕事を続けていけるよう見守りが必要とMさんは捉えています。そして、親と同居している今は良いが親の亡き後はどう生活していくのか、長期的な展望についても向かい合う必要があると語ります。

ヒアリングを終えて

ルリコさんは、専門学校卒業後、いくつかの職場になじめず、10年間ひきこもり生活を続けていました。

ひきこもりの要因は、学校や職場でのいじめや排除などの社会的要因、精神疾患や発達障害など医療的ケアが必要なものなど様々ですが、ルリコさんの場合は、学校や職場でいじめをうけたり、辛い労働を課せられたりということはありません

せんでした。しかし、小学校から専門学校までの学齢期に友達らしい友達はおらず、友達がいないことを、家族もルリコさん自身も問題にできませんでした。

社会の中で生きていくために、他者の感情を察知する能力（社会的感受性）と共に、感情的知性（EQ = Emotional Intelligence Quotient = 自己の自覚、自己の制御、社会的自覚、他者との関係の制御）が必要になりますが、これらは、まさに、友人関係や家族関係など人との関係の中で培われるものです。ルリコさんは、育つ環境の中で、そうした力を育む機会がとても少なかったのかもしれません。

本事例は、ルリコさんに、働くことのなかで、社会的感受

性も感情的知性も育つ場が提供されています。

そして、未だ道半ばですが、確実に、この場が、ルリコさんの自己肯定感を高め、自立に向わせていると思わせる事例でした。成人の年齢に達しても、社会での様々な挫折感から自らが社会に適応できない理由が明確に掴めないまま、不適応感ばかりが強くなり、社会で生きようとする意欲が低下するケースが一定数あることを M さんが話していました。ルリコさんのひきこもりの生活が 10 年でピリオドを打つことができたのは、ルリコさんの理解を深めながら伴走する人と場のチカラによるものと改めて思います。

コラム



人との関わりによって湧きだすエネルギー

NPO法人サンカクシャ
代表理事 荒井 祐介さん
Yusuke Arai

昨今、SNS や動画配信サイト、ゲーム等が充実しており、時間を消費するということが、さほど難しくなくなってきました。以前、若者が「何かに夢中になっていれば、何も考えなくて済む」こんな話をしてくれました。葛藤などは、たくさんあるものの、目を背けられる環境は整っています。葛藤していることを誰かに話すというのはハードルが高い行為です。

すぐ、動かなくてはいけない、などの課題が明確にあれば良いのですが、ない場合は、話ができる人間関係を築くというステップが必要になります。現状を変えたいと漠然と思っただけのもの、自分から何をしたら良いかわからないし、話せる人もいない。そう感じている人が多いのではないのでしょうか。

相談の前に、関わりを創れる場所が必要だと私は考えています。各地で居場所づくりが広がっていますが、居場所は、まさに人と関わる場所であり、相談の前に繋がる場所としては最適です。

居場所を通じて、人と話すことで、相談する意欲が湧いてくることや、働くうえで必要な他者との関わりにおいて大事なことを学ぶきっかけにもなります。

人との関わりの中で、エネルギーが湧いて、何かが行動してみようと思う若者は多いです。時に人とぶつかることもあります。その出来事を通じて、他者の気持ちを考えるきっかけができます。何気なく、人と関わる場所がコロナの影響もあり、減ってきていますが、働くうえでも、人が生きていくうえでも、欠かせない人との関わりを、私たち支援者が地域に沢山つくる必要があるのではないのでしょうか。



社会的に孤立しやすい若者の現状と支援

よこはま若者サポートステーション
(特定非営利活動法人ユースポート横浜)
施設長 熊部 良子さん
Broko Kumabe

よこはま若者サポートステーションは年間述べ 13,000 人以上の方に利用されています。その中には、ルリコさんのように社会との関わりがなくなってしまった状態が長く続き、どうしたらよいか分からないと、相談に来られる方も多くいらっしゃいます。そのお一人お一人のお話を丁寧に聞きすることからサポートステーションの相談支援は始まります。

お話を伺っていると、社会から離れたきっかけや要因は様々ですが、ひとたび無業状態となってしまうと人間関係や社会関係が失われ、社会的孤立が長期化しやすい日本の社会構造がその背景にあると感じます。人生の中で、時として不登校や無業になること自体は決して悪いことではなく、状況によってはむしろそれが必要な時もあると私は捉えています。しかし、それをきっかけに自己肯定感のより一層の低下を招き、社会に存在する意味を見失い、ますます社会との接点を見出すことが難しくなるといったスパイラルに陥ってしまうことがあります。また、若者の無業やひきこもりは自己責任であるとする風潮は日本ではまだ根強く、若者やその家族が社会へ助けを求めることを躊躇することがあります。それも長期化の一因にあるのではないかと思います。

このような苦境に立つ若者に対しては、支援者が性急な結果を求めたり、あらかじめゴールを定めてその方向へ導いたりするのではなく、ルリコさんの事例でも述べられているように若者の語りを丁寧に受け止め、あくまで若者が主体的に若者自身の Well-being を実現するための支援が重要だと思います。目指すのは就労だけではなく、医療、福祉、教育、その他様々な地域社会の資源を活用しながら若者が地域社会の一員となってその人らしく暮らしていけるようになることです。そのためにはルリコさんの事例のように本人を理解し伴走する人との出会いや多様な支え合いの場を増やすこと、地域ネットワークの構築や新たな制度作り、若者を取り巻く社会課題の解決など様々な取り組みが必要だと思います。

Case 9

プレーパーク

地域の自然と人、そして
プレーパークが僕を育ててくれた

事業所のプロフィール

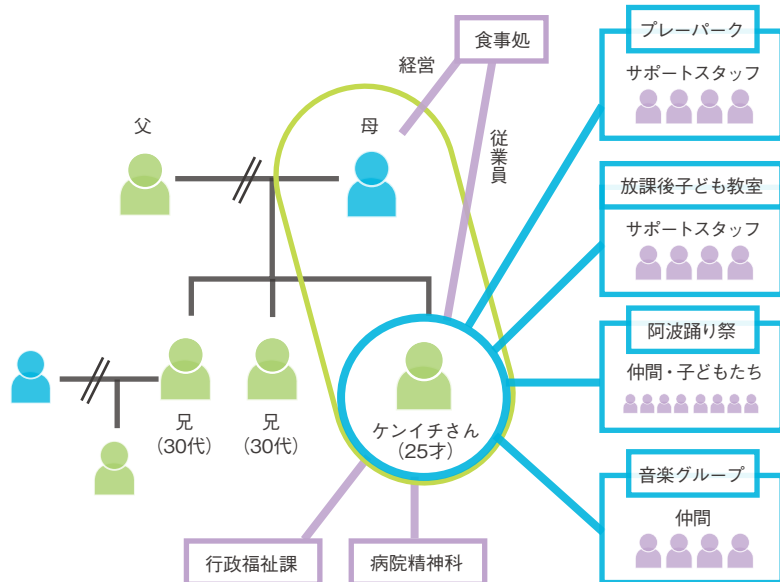
活動種別	プレーパーク
活動地域	県西地域 6 か所
活動開始年	2015 年～
活動場所	公園・森林ほか
活動日	不定期
参加者数 (平均)	30 ～ 80 人
参加費	無料
主なネットワーク	県西地域 6 か所のプレーパーク、行政

プレーパーク（冒険遊び場）は、1940 年代にヨーロッパを中心に世界各地で展開されるようになった遊び場です。子どもたちの遊びの自由を最大限に確保し、多世代にわたる市民の地域空間を創出します。日本では、1970 年代、当時の公園に禁止事項が多く、子ども達がそうした規制から解放される空間づくりという意味合いも含め、東京都世田谷区の「子ども天国」発足後、1999 年に「全国冒険遊び場研究集会」が開催され、全国各地に広がりました。プレーパークには、プレーリーダーという専門職が配置されており、「子どもたちの創意工夫・創造を創出する空間づくり」「子どもたちの居場所づく

り」「住民参画の場づくり」を専門性としています。本事例集との関係で特筆すると、「子どもたちの居場所」については、子ども達が安心して自分を表現できる環境や関係作りに加え、課題を抱える子どもの社会的養護に配慮した日常対応やプロジェクト、また、子どもの興味関心が広がる地域のネットワークづくり、表現や参画の機会の創出なども、具体的な専門性として挙げられ、期待されています。

本事例は、プレーパークの代表者である O さんと、この地域とプレーパークがあったから今の僕がいると話す、ケンイチさん（仮名）のお二人にヒアリングをしたものです。

PROFILE



自然の中を駆け回ってよく遊び育ちました。しかしながら、学校の勉強の中には、ついていきにくい教科があり、次第に他の生徒との遅れも目立つようになりました。また、生活の面でも、人込みは極端に苦手で、息苦しさをを感じるなど体調不良も起こしてしまいます。また、責任感のある一方、失敗を恐れ、ものごとから逃げ出してしまうようなこともありました。こうしたことは、周囲には理解されにくく、孤独感を感じることも多かったようです。中学生の時に、ケンイチさんは、かかりつけ医の紹介で、障害関係の診断を受けたところ、広汎性発達障害と診断され、療育手帳の交付を受けました。

ケンイチさん（仮名）は、現在 25 歳。神奈川県最西端に位置する丹沢山地の麓のまちに育ちました。

家族は、母と 2 人の兄で、父母は、ケンイチさんが中学生の時に離婚しています。現在は、兄達も独立しており、母と二人暮らし。母は食事処を営んでおり、ケンイチさんも板前もする従業員として働いています。

ケンイチさんは、幼児期より、虫や魚が大好き。地元の

当時ケンイチさんは、進路や就職のことなども考える時期でしたが、自分自身と同年代の仲間との違いや、自分自身がどう生活していくのか、いけるのかについても悩みを持つようになりました。そんな時、ケンイチさんが、家にこもることなく悩みを持ちながらも地域で活発に生活できたのは、子どもの時からケンイチさんを勇気づけ活動の場を与えてくれた地域の人々、またプレーパークに集う大人や仲間達でした。



子どもの頃

誰もあそんでくれなかったけど、
山と川は遊んでくれた。



いまは…

「自立」についてちゃんと考えたい。
自立する自分でいたい

支援のプロセス

<地域の見守りと支え>地域の自然と人が子どもを育む

「誰も遊んでくれなかったけど、山と川は遊んでくれた」と語るように、ケンイチさんは、川では上手に魚を捕ります。魚の名前や生態についても、かなりの詳しさです。

地元には、イノシシなどを狩るハンターがいて、小学生当時、興味津々のケンイチさんは、一緒に山に入らせてもらいました。山に入ると、はじめて観る沢山の昆虫や草花、木々。ケンイチさんが関心を持つと、ハンターのおじさんが図鑑をプレゼントしてくれました。この図鑑によって、山の生き物について更に知識を増やしました。「ハンターのおじさんは、獲物を捌くことだけは、幼い僕に見せなかった。残酷に感じるだろうと配慮してくれたんだろうと思う」とケンイチさん。大人の配慮が伝わっています。

個別支援級の後輩とその父親であるOさんとの出会い

中学の個別支援級の2年後輩のM君が、ある日、いじめにあっていないことを知りました。周囲から、からかわれたり、疎外されたりして、学校に行かなくなってしまいました。そんな彼をケンイチさんは心配し、外に連れ出します。その頃、M君の父親であるOさんとも出会います。

Oさん夫妻は、息子が発達障害であることを知り深く悩みました。どう育てていけばよいのか…。容易にこたえは見つかりません。Oさんが、初めてケンイチさんと会ったのは、小学校3年生の彼が、自転車の後ろにスケートボードを繋ぎ、スケートボードに大きな亀を括りつけて、自転車で疾走していたとき。その亀どうしたの?と聞くと、「川で捕まえたんだ」と応えたのだそう。Oさんは、その時、ケンイチさんに「生きるチカラ、たくましさ」を感じたのだそうです。

ケンイチさんにとってもOさん親子との出会いが、Oさん親子にとってもケンイチさんとの出会いが、その後、15年以上の関係に繋がっていきます。

やんちゃ盛りだった中学生生活を支えてくれた

町のお巡りさんや先生

ケンイチさんは、中学時代、やんちゃだった頃（本人曰

く）、のことを話します。そのころ、町の交番のお巡りさんは、ケンイチさんをみると決まって声をかけたそうです。たしなめることはせず、いつもかまってくれるような口ぶりで、笑顔の人でした。ケンイチさんもお巡りさんが好きだったのでしょう。何度もお巡りさんの名前がインタビューの中に出てきました。

また、担任の女の先生もケンイチさんをいつも見守ってくれたといいます。学校にどうしてもいきたくなくて休むと、先生が迎えに来ました。「ケンイチは足が早いから、大会に出てごらん」と勧めました。「陸上選手として頑張りたいなら、タバコなんて絶対吸っちゃダメなんだからね」「走るの好きなら、ここの高校なら続けられるよ」。いつも、ケンイチさんを見守ってくれていたように感じるそうです。

継続できなかった高校生活

ケンイチさんは、特別支援学校の高等部に進学しましたが、途中で続けられなくなりました。高校生になり、様々なアルバイトも経験しました。中学時代とは異なる、世代の違う人との関係や責任も生じる立場に置かれることも増え、行く先々で出会う様々な人との関係を大切にしたいと思いました。人から信頼されたり、職場で必要とされる実感も持てるようになりました。

でも、そんな中、ケンイチさんは、自分自身の、適切に役割や仕事ができなかったと感じる行為に気づくと、大きく落ち込み、その場に行けなくなってしまったりすることもありました。他人から見たら、小さな失敗、取り返しがつかないことではなくても、押しつぶされるような気持ちになり、どうしても、足が向かなくなってしまうのです。だからアルバイトを変えることもあったし、高校生活も続けにくかったのです。ケンイチさんは、中学生の時に先生にすすめられて診断を受け、自分が、自閉症スペクトラム障害（発達障害）であることを知りました。自分の身におこることが障害だからと思うと辛いわけではないのですが、それでも、知ることができて良かったと思っています。なぜなら「自分を理解することが出来たから」。もし、知らないままだったら、人とちょっと違う自分を、持てあまし、生きづらさや孤独を、感じていたと思うからです。

大人に近づくからこそ必要なサードプレイス(地域の居場所) 「仕事」という居場所で得るものとつまずき

○スーパーの惣菜コーナーのアルバイト

自宅の近くにある大型スーパーの惣菜売り場で働きました。一緒に働くおばちゃんたちにも恵まれてやりがいを感じながら仕事を覚えました。各種惣菜をパッキングするのが中心的作業ですが、効率よく、正確に作業を進めることができるケンイチさんは、後から入ってくる学生アルバイトに仕事を教える立場も任せられるようになりました。

ところが、ケンイチさんは、仕事を理解し、実行することはできるのですが、自分の行っている仕事を言葉にして、他者に伝えることが苦手です。せっかく認められ、この立場に就いたにも関わらず、この職場を去ることになってしまいました。

○物流倉庫&電力会社の警備員

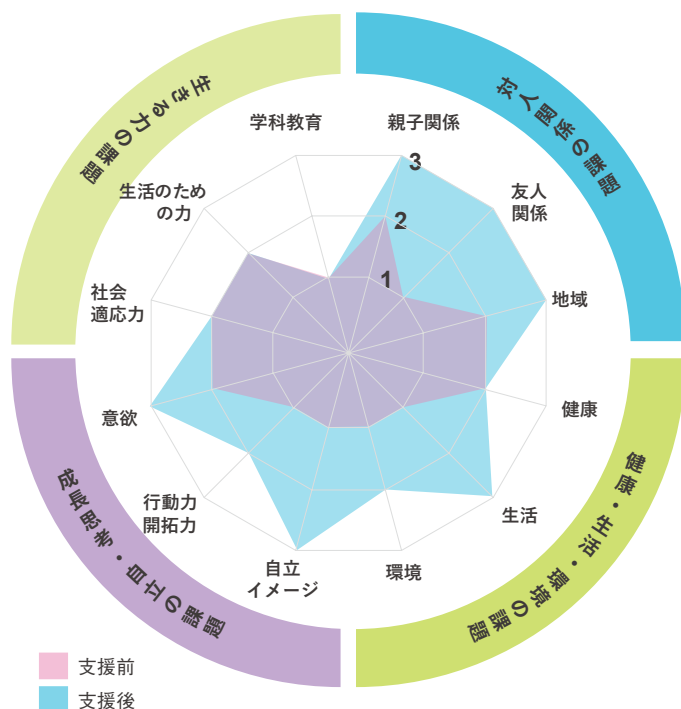
倉庫の仕事は、バーコードを読んで、棚のなかに入れる作業でしたが、大きな倉庫の中のいろいろな場所に行けて、仕事にも変化があり面白くて頑張りました。電力会社の仕事は、車両誘導の仕事で、18歳から3年間程度働き、仕事も確実にを行うことができるようになり、上司から、資格をとることができるので受験も勧められました。

しかし、試験会場まで、電車に乗っていくことに自信がなく受験ができません。更に、ある日、交通誘導について、新人に教えた事柄がうまく伝わらず、バスと作業車が接触するという事故が起きてしまいました。ケンイチさんを責める職員は誰もいなかったのですが、ケンイチさんは、「最悪なことをしてしまった」と次の日から仕事に行けなくなりました。

これらの仕事は、結果的には退職することになってしまいましたが、職業的スキルを身に着け、職場での人間関係を構築するチカラも養った、家庭や学校とは異なる重要なサードプレイスだったと思っています。一方で、必死で、努力し頑張った先に、自信を失い、電車やバスに乗れなかったり、人の大勢いる場所が一層苦手になったり、生きにくさとも葛藤しています。

○さんによって導かれたケンイチさんの活躍の場 放課後こども教室

○さんの息子 M 君は、小学生の時にアスペルガー症候群と診断されました。○さんは、音楽が好きな M 君のため、音楽家など様々な人たちとのつながりをつくりました。様々な刺激を受けて意欲的に取り組む M 君を観て、○さんは、自分の息子だけでなく、様々な子どもたちのために、人の



つながりを創っていきたいと思うようになりました。

また、中学でいじめられた息子の M 君が、ケンイチさんを頼り、二人が兄弟の様に絆を深めていくのを見て、どんな子ども達にも同世代の仲間も必要だと感じました。

○さんは、役場の職員の勧めや協力もあり、はじめにプレイパークを、続いて、子ども達や地域の保護者達をつなげ、子どもたちが、等しく、生き生きと成長できるようにするために「放課後子ども教室」を開設しました。そして、立ち上げメンバーに、ケンイチさんを誘いました。ケンイチさんはコミュニケーション能力も高く、正義感も強く、優れた生活力を持っています。自然豊かなこの地域で、地域を活かしたプレイパーク、放課後子ども教室を立ち上げるならば、虫や魚、山草などに詳しく、自然の中で遊ぶことが好きなケンイチさんが、きっと活躍するだろうと思いました。予想は的中！ケンイチさんは、「お兄さん先生が来た!!」と大人気です。

ケンイチさん自身、子ども時代に、理解されにくく、苦労してきた経験があるためか、子どもたちの様子をよく観察しており、「一人ぼっちでいる」「元気がない」など気づくと、すぐサポートの手を差し伸べます。

○さんは、「ケンイチさんは、花が開くようでした」と話します。自分の好きなことが誰かの役に立つことが大きな手ごたえとしてあったのでしょうか。時には、責任が重く感じて、逃げだしてしまいたくなることもあります。そんな時、○さんの「自分のペースでいいよ」の声掛けに、ケンイチさんは救われます。大好きな地域のプレイパークに今も関わり続けています。

ヒアリングを終えて

ケンイチさんは、幼児期より地域の人々に、気かけられながら成長しています。だからたくさんの方がケンイチさんの障害や生活のしづらさを知っているし、一方で、ケンイチさんが優しさや強さを備え、懸命に努力し、生きようとしていることも知っています。

Oさんは、子ども達の主体性を大切にしたいと思っています。子どもたち同士、仲間を創って遊べるようになることを願っています。今ケンイチさんは、これまで通り自分自身が自然を楽しみながら、子ども達とともにいます。例えば、地域の川はとても美しく魚も沢山いますが、子どもだけの川遊びは危険なので禁止されています。でも、プレーパークの活動日には、ケンイチさんも他の大人もいるから大丈夫！あーという間に魚を捕るケンイチさんは、子ども達のヒーローです。心配顔だった親たちまでも、ケンイチさんのレクチャーで魚捕りのコツを教えてもらおうと、夢中になって遊びます。楽しそうな親たちを観て、子ども達はますます、川遊びが楽しくなります。

ケンイチさんは、今、お母さんが営む、地域の食事処を手伝っています。魚好きのケンイチさんは板前になりたいと考え修行にもでて、今では船盛も作れるようになりました。

ケンイチさんの成長に不安があったらうお母さんは、今後のケンイチさんの更なる自立のためには、母親の自分が「子離れ」しなくてはとつぶやきます。学校でいじめにあったOさんの息子のM君は今もケンイチさんと大の仲良し。M君も音楽を続けており、ライブハウスでの演奏も実現しました。時にはプレーパークで、ケンイチさんや他の仲間と一緒に歌と演奏を楽しみます。

ケンイチさんのお母さん、M君のお父さんのOさんもまた、過去15年、子どもの成長を共に見守り、親としての役割を考えながら手を携えて生きてこられたこと、これからも支え合う関係でいらっしゃるだろうことが伝わってきます。

取材を終えて、長年にわたる地域の人々のつながりが、子どもや若者に限らない地域の住民をいつの間にか支え、支え合う人へと変化させ、個人と地域をエンパワさせていることを実感しました。ケンイチさんやM君の生きづらさ、Oさんやケンイチさんのお母さんの親としての不安は、簡単に解消されるものでは決してないと思います。しかし、身近な地域の人々がつながり、想いを分かち合う積み重ねによって、生き抜くチカラを誰もが養い合っているのかもしれない。生きづらさを抱えやすい時代、障害児者だから、子どもだからということではなく、地域皆のための緩やかな空間があることは、価値あることと思います。

コラム



豊かな体験の場で輝く若者たち

県西地域プレーパーク 遊Being♡あしがら
世話人 山崎 由恵さん Yoshie Yamazaki

地域で子どもを育むということ。令和3年9月8日に文部科学省の調査で、世帯収入に関わらず多様な体験（自然体験・社会体験・文化的体験）が子どもの成長（自尊感情・自己肯定感・外向性・精神的な回復力等）に好影響を与えるという結果が発表されました。

私も参加している神奈川県県西地区に誕生した8つのプレーパークは、それぞれ個性的な活動をしています、「豊かな体験の場」であることは共通しています。ケンイチさんの育つ家庭は、裕福とはいえません。発達障害という生きづらさも抱えて、時折、襲ってくる精神的パニックに怯えることもしばしばです。しかし、ケンイチさんは、身近な人たちに、いつも気にかけて（ケアして）もらっています。

周囲の人がケンイチさんを気にかけるのは、彼が、自分の障害を隠していないから。また、自分の弱さを知りながらも、なんとか、それに向き合って生きていこうと頑張っていること

を知っているからだと思います。

彼の最大の強みは、豊かな自然の中に身を置き、自分を癒す術を知っていること。大きな自然に生かされている自分を体感しているところです。地域の自然と人々の交流、仲間たちが、ケンイチさんへの、地域でしかできない「支援」「育み」となり、長い間、緩やかに施されています。そしてケンイチさん自身、そのことにとても感謝しています。

彼とM君についても、互いをリスペクトし、その関係を育て、育ちあっています。また、彼らの関係性や成長によって、プレーパークの活動が広がりをみせています。

普段、小さな子ども達がいるとじっくり楽しむことができない屋外での音楽活動を、「焚火を囲む唄うたいの会」を発足させて実現させました。普段プレーパークに縁がない若者達が、より広い範囲の地域から集う会になっています。ひとりからの小さな願いが、みんなの願いになって、輪になる。多様な経験を積むケンイチさんは、沢山の輪の中にいるし、時には、輪の中心にいて輝いています。子どもや若者の願いや育ちを大切に作る町は、豊かな人間関係に溢れています。ありがたい自分は、人を笑わせ、楽しませることができる人です。地域のお祭り、人一倍、活躍し、輝く、彼に出会います。

Case10

子ども食堂

コロナ禍、地元学生と子ども食堂 のマッチングで、まちを元気に！

事業所のプロフィール

活動種別	子ども食堂
活動地域	川崎市
活動開始年	2015年～
活動場所	介護施設、居酒屋、保育園他 11 か所
活動日	各会場月 1 回（同日開催）
子ども食堂の参加者数	平均約 20 家族（40 名）
学生ボランティア数	約 80 名程度
参加費	子ども 100 円 大人 250 円
主なネットワーク	地元商店、行政、自治会町内会、小中高校、保育園

今日、経済成長至上主義が事実上の終焉、超少子高齢社会の到来を背景に、生活の質を重視した新たな社会システムとして、地域住民を主体とした地域福祉活動の推進、地域社会の再生を行うことが不可欠です。同時に、自治体による、医療・保健・教育・就労・住宅・環境・まちづくりなど、多様な生活関連施策が期待されているところです。

本事例の子ども食堂を運営している NPO 法人は、当該地域の自治体の施策に基づき、地域の住民主体で運営するまちづくりプラットフォームとしての役割も担っています。人口 21 万人。都心へのアクセスのよい郊外の町は、地域資源・知的資源・人的資源の豊富な町です。一方、今後、人口減少、更なる高齢化が予測される中、「持続可能なまち」「みんなが幸

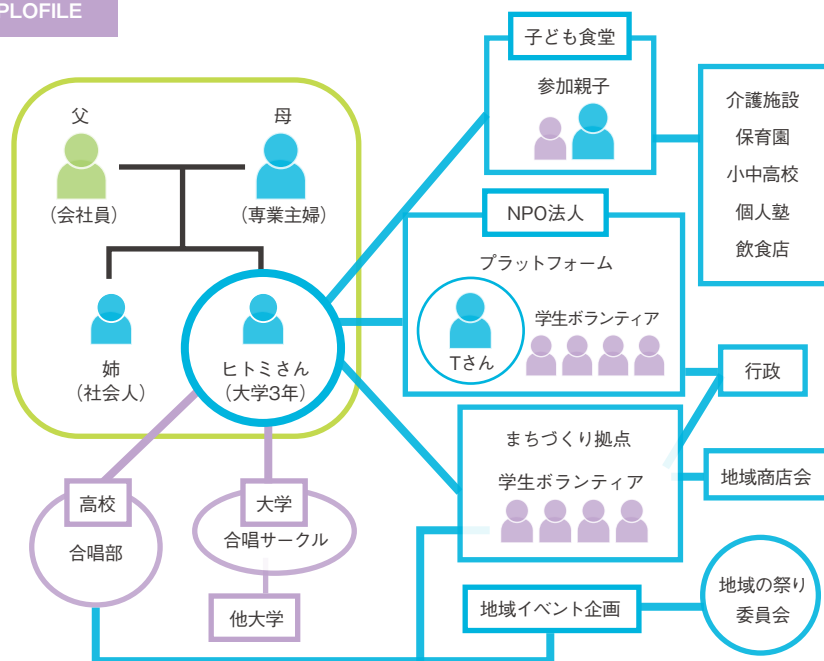
せなまち」を目指し、住民が自分ごととして、まちづくりに参加し、世代や立場を超えての協働を推進しようとしています。

子ども・若者の健やかな育ちや自立には、当事者の有する個人因子が大きく影響しますが、子ども・若者が育つ環境因子も影響を及ぼします。

本事例で取り上げる個別ケースは、当該地域のまちづくりプラットフォームが住民同士の交流を活発にし、住民ニーズにあった社会資源を住民と共に生み出そうとする、取り組みに主体的に参加し、個人と地域がエンパワメントされているケースです。

まちづくりプラットフォーム事務局長 T さんと本事例ケース、ヒトミさん（仮名）に、ヒアリングさせていただきました。

PROFILE



ヒトミさん（仮名）は、現在大学3年生。家族は、会社員の父と専業主婦の母、社会人5年目の姉の4人家族です。地元公立高校から、食と医療の双方を学ぶことができる「栄養学」を選択し大学に進学しました。高校時代、最も力をいれて取り組んでいたのは合唱部の活動。学校では、文化祭や体育祭のイベントで活躍する人や、部活では圧倒的に運動部が注目される

中、とにかく地道な練習の積み重ねが大切な合唱部は注目されにくいところがあったけれど、仲間もいて、活動が好きでした。でも、練習に没頭する毎日だったので、アルバイトもしていなかったし、社会との接点は少ない高校生活でした。だからこそ、大学に入学したら、いろいろな体験をしたいと考えていました。入学してすぐに、大学でも合唱サークルに入り、他大学との合同サークルにも参加することにしました。大学でのたくさんの出会いに期待していましたが、表面的な会話に留まって、期待していたほどの人のつながりができにくいとも感じました。

何か、別のチャレンジをと考え、大学の学生団体ボランティアサークルを訪ねましたが、体験したい活動は場所が遠い、また、

活動するにあたって会費もかかることがわかりました。できれば、地元でできるボランティアを考えて探したところ、自宅のすぐ近くに NPO 法人が開設している「子ども食堂」があることがわかりました。子ども食堂なら、自分が学んでいる栄養学にも通じると思い、NPO 法人の事務所を訪ね、ボランティア登録をしました。ここから、ヒトミさんは、様々な経験を重ねます。



活動前

なんとなくみんなと同じことを
して生きていけたらいいかな…



活動後

自分の人生は自分で作らなきゃ
いけないんだ…

支援のプロセス

<ボランティア活動との出会いと参加>

不安や焦りを感じながら自分と向き合う

ヒトミさんはこう語ります。『大学は、社会に出る前の助走期間であると思っていました。だからこそ、何を考え、何をすればいいのか、焦りも感じます。高校までは、先生との距離が近く、何かあれば相談したりする関係だったと思います。しかし、大学は、高校とは比べ物にならないくらいの距離があって、頼る存在がいない心細さを感じました。』

私たちの学年は、1年生の終わりに、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、2年生からはオンライン授業になりました。期待していた大学生活とは一層、かけ離れた時間を過ごすこととなります。今、3年生になりましたが、大学4年間といっても、大学1、2年をどのような環境で過ごすかは、その後に大きく影響すると感じています。

私の場合は、期待していた大学生活とは異なっていたものの、人との出会いを求め、社会的な経験をすることを求め続けたことで、現在の活動の入口にたどり着けたのかなと思います。』

新たな出会いや協働を通して

ヒトミさんが訪ねたNPOの事務所には、Tさんの他、既に活動している大学生もいてとても明るい雰囲気でした。びっくりしたのは、当時通っていた自動車学校の教習で一緒の車に乗り合わせた男子学生がボランティア希望の面接に来ていたこと。世間は狭いな…と思うと同時に、地域には自分と同じようにボランティアを希望する学生がいることを知って、なんとなく嬉しくもなりました。地元の活動なので、出身高校の学生もいると聴いて、更に安心しました。

しかし、いよいよ活動をはじめると、他の学生メンバーが、様々な経験をしていることや、自分のやりたいことが明確なことに圧倒されました。そして、「自分は何ができるのだろう?」「今まで何をしてきたのか?」という想いを持ちました。それでも活動に参加するようになって、仲間の学生メンバー達と、本気で意見を出し合い、一緒に活動することで刺激をもらい、さまざまな価値観に気づき、自分の視野が広がって

いくのを感じることができました。

<社会を意識する経験>

「子ども食堂」の活動から気づくこと

プラットフォームは、保育園や福祉施設、民間の商業施設や飲食店など、さまざまな地域の理解と協力を得ながら、徐々に子ども食堂の数を増やしていきました。

ヒトミさんは、子ども食堂のボランティアをはじめた頃、子ども食堂が必要な社会の実情等についてはほとんど知識がなく、この活動が、地域活性化も目的と捉えていることも、詳しく理解できていませんでした。

複数の子ども食堂には、共通の運営形態があります。メニューはカレー。沢山の親子のために、カレーをいっぱい作ることも、訪れた親子と話をするのも初体験。ワクワクしながら、一生懸命取り組みました。子ども食堂ですから、メインは子どもと思いきや、実は共働き家庭が多い地域、乳幼児の子育てをしながら働くお母さんが多数いることから、「親がゆっくり食事ができるようにする」も、大切なコンセプトでした。そのため、学生ボランティアは、子どもの遊び相手になります。母親たちは、周りへの迷惑を気にせずに会話を楽しみ、近所にママ友ができて嬉しそうです。

親子もボランティアも回数を重ねて、お互いを知るようになるのと、ボランティア学生は親たちとも話をする機会が増えていき、学生の自分たちとそれほど大きな年齢の差もない親たちの話が、とてもためになることが多いことに気づきます。

「多くの家庭が共働き」「夫婦共に正規職員の家庭も多く経済的課題は少ないものの、時間的・物理的に仕事と育児の両立が難しい」「家庭や子育ての価値とキャリアを重ね責任を果たす仕事の価値との間での葛藤」「父親の家事・育児への協力状況と母親の家事・育児の負担」などの話題は、ヒトミさんの5年後、10年後に起こることかもしれない、他人事ではないと思うようになりました。

ヒトミさんが生まれ育った当時から、この町は経済的には比較的豊かで、都心で働く父親と専業主婦の母親という家庭がほとんどでした。しかし、今後この町で結婚生活をはじめることになれば、ヒトミさんも仲間も、ほとんどの

場合、共働きをしていくことになるのではないかと考えています。保護者との対話から、自分がどのように職業を選択し、どのような暮らしをすることになるのか考えるきっかけを与えてもらいました。

若い世代の町づくりへの参画推進

Tさんのプラットフォームは、2020年3月からまちづくり拠点の活動をスタートし、さまざまな取り組みを展開しています。地域の会合には学生も積極的に参加します。学生ならではのアイデアで、地域を盛り立てるイベントも行われるようになりました。地域で「合唱」に取り組みたいとの声が挙がり、ヒトミさんが活躍する場ともなっています。

学生ボランティアのほとんどが地元に住んでいます。Tさんの企てでもありますが、活動に参加することで、中高の同級生や先輩後輩と再会する機会となります。

地域の県立高校には、学生ボランティアが学校にバックアップをお願いし、登録ボランティアの出身中学校・高校名も掲載した、ボランティア募集のチラシを配布してもらっています。身近な同世代が、まちのための活動をしていることを知ってもらって、ボランティアを自分ごととして考えてもらおうというねらいです。

現在活動するボランティア学生たちが、「楽しさ」だけでなく、「充実感」を得て、「社会」への関心や主体的な取り組みが自分たちにもできると実感しているからこそ取り組みです。

学生たちの活動が、地域の活動へと広がり、そしてまちづくり、人材育成へとつながり、社会を変える取り組みにもつながる可能性があることも実感しています。

社会人となる助走期間だからこそ活動

子ども食堂に参加することで、保育士が不足していることも知りました。保育科でなくても大学2年になると保育士試験の受験資格を得られます。活動を通して保育に関心を持った学生には、4年までに資格を取得して、保育士としてアルバイトをするメンバーもいます。保育士不足解消につながるかもしれません。ヒトミさんも既に何科目かは単位を取得しており、次の試験にもチャレンジする予定です。

ヒトミさんは、将来について、具体的なビジョンを持つことより、何事にもバランスの取れた人間になりたいと

思っています。この活動に参加して、学生に限らず考え方や人間関係等、柔軟に動き、考えられる人がいると、活動が前に進み、横に広がっていくことを目の当たりにして、人の存在価値を改めて考えました。どんな職業に就いても、どんな活動をして、謙虚さを忘れない人でありたいとも感じています。

3年生となり、活動を通して、大学生活では出会うことができなかった多くの仲間とつながることができました。多様な価値観を認め合うこと、活動を通しての社会とのつながりは何ものにも代えられない財産だと感じています。

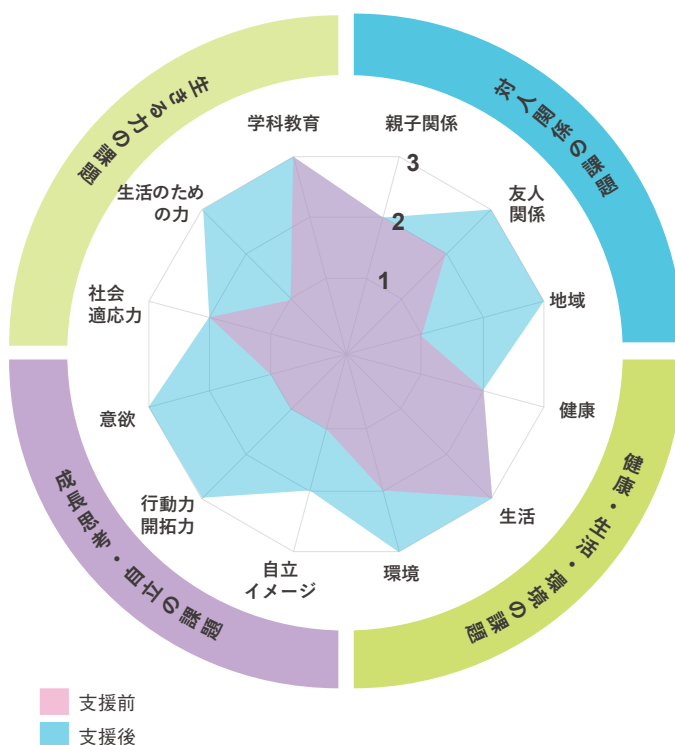
支援による変化

エンパワーされたこと

＜対人関係＞多様な価値観を受け入れる

＜生きる力＞社会性の広がり

＜成長思考・自立＞進路に対する多様性に気づく



ヒアリングを終えて

「住民主体のまちづくり」が声高に言われますが、学生に限らず、地域やまちづくりに参画するきっかけが私たちの暮らしの周辺にはそう多くはないと思います。プラットフォーム事務局長のTさんが、まちづくりをするうえで大切にされていることは、そこに関わる全ての人が、出会えてよかったと感じ、人や地域への関心が高まること。

この子ども食堂は、誰をターゲットにしているかと言えば、担い手である大学生と子育て中の親たちだと思います。学生たちは、コロナの影響も受け、人とのつながりが一層希薄となり、ヒトミさんも話していたように、大切な社会に出る助走期間を不活発に過ごすことになっていました。また、子育て中の保護者も、共働きが多く、地域との関わりが少なく、リモート勤務等、生活環境も変化し、不安も高まっていると思います。学生同士、保護者同士はもちろん、学生と保護者のつながりが生まれた子ども食堂は、食の提供に

留まらず、新たな出会い、そして、互いへの関心や自分たちの暮らす地域への関心へと広がっています。そして、その出会いが、新たな主体の地域づくりへと発展しています。

本事例集は、現代の育ちや自立に課題を抱えた子ども・若者の多様なケースを取り上げてきました。その中で、ヒトミさんは、これまでの福祉事業等の観点でみると、課題として捉えることのない事例かもしれません。しかし、大学生という社会に出る前の若者が、多様な人と向き合う関わりを経験することで、若者の育ちや自立が、大いにエンパワーされている事例です。

Tさんのまちづくり、環境支援からの取り組みが、個人の生き方に多様にプラスの影響を与えることをヒアリングによって、改めて実感しました。Tさんの、ヒトミさんの語りを見守る様子、まっすぐ私たちをみて、自分や活動について語る様子に、明るい町の未来を感じました。

コラム



地域の人々がまぜこぜに集う場で エンパワされる若者たち

株式会社イータウン 代表取締役
横浜コミュニティカフェネットワーク 代表
齋藤 保さん Tamotsu Saito

地域社会との接点が失われて久しい現代社会。伝統的な祭りや地域行事などの衰退とともに、都心部郊外など新しいまちでは、そうした地域コミュニティや関係づくりを望まない人が増えたこと。核家族化や親族関係の希薄さ、町内会やこども会を、はじめとした、地縁系活動から距離をおく住民の増加も要因と思われます。

しかしその一方 1990 年代頃から新たなテーマコミュニティ構築を模索する市民運動や市民活動が盛んになってきました。自分たちの関心あるテーマや活動にとどまらず、地域を俯瞰して観察し、今、必要な活動を模索し実現するため、多様な市民が複相的に関わり、他の団体や行政との関係をつくり連携協働が推進されるようになりました。

ヒトミさんのケースも、学生たちが集まり合唱を楽しむこ

とも大切な活動ですが、地域と接点を持ち、さらに一步踏み込んで、地域課題を感じた多様なメンバーで、子ども食堂運営という活動と出会っています。そして、まちの様々な人材がまぜこぜになり、一緒に考え、学び合い、工夫を凝らすことで、意外性をもった化学反応が起きている事は着目すべき点です。同時に、そうした多様な主体が混ざって活動している事に参画するヒトミさんが、やりがいや意義を強く感じていることは、昔よく言われた「若い人の地域離れ」を逆行する素晴らしい価値が醸成されているように思われます。

そしてなによりも若い学生たちが、足元から自分自身の生き様と向き合う、実体験の機会が設けられ、一步チャレンジできる環境が用意されたことは、これからの多世代が関わる重要な価値になっていくと思われます。こうした豊かな活動が各地で実践推進されることを期待します。

今後は、こうした取り組みを、より広く地域の団体や、企業、行政なども課題共有し連携を深めて取り組みを行い、結果的にそれらをコーディネートしていく中間支援的な機能が地域で自然体でできあがっていく事がなによりも、地域課題解決には重要なポイントだと考えます。

エンパワーされた10人の子ども・若者 心豊かな地域の支援者たちとの出会いから

特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター



身近な地域で、支援の狭間に落ちる子ども・若者を 発見するセーフティネット

本事例集は、居場所や支援の類型（子ども食堂・学習支援・プレーパーク・学童保育等）、子ども・若者の年齢、抱える課題の類型など、多様性を考慮してケースを選定し、支援状況・支援による変化を表すため、ジェノグラム&エコマップ、レーダーチャート、子ども・若者が発したつぶやき等、共通の項目を設定して表しています。

制作を終えて、支援団体の類型によって、子ども・若者への向き合い方には大差はなく、いずれの支援者・支援団体も、子ども・若者が、1) なにかしらの危険にさらされていないか 2) 孤立してはいないか 3) 成長が保障されない環境にいないか 4) 家族以外の支援を必要としていないか等、子ども・若者の課題というより、もはや「生きづらさ」を、関係性の中で掴むところから支援を始めていることが明らかになりました。

この共通性は、ヒアリングによる支援のプロセスや、本事例集の試みである、支援による変化を確認する指標等の結果によっても確認することができます。

本事例集は、全て住民主体の取り組みによって支援された、子ども・若者を取り上げています。どのケースも複合的な課題を抱えており、公的な支援につながりにくい、あるいは、つながっても継続的な支援を受け続けることは難しいだろうケースです。そして、これらのケースが気付かれることなく支援につながらなかったとしたら、子ども・若者の育ちや自立に、不安のあるケースです。

住民主体の活動が、身近な地域で支援の狭間に落ちる子ども・若者の存在に気付き、地域住民であるからこそその関係性の中で、子ども・若者の課題を掴み、柔軟な支援が行われる実態を観て、これらの活動が、子ども・若者にとってのセーフティネット機能を果たしていると観ました。

身近な地域の関係性の中でエンパワされる子ども・若者たち

「ジェノグラム&エコマップ」では、支援団体の類型に関係なく、いずれの事例も支援の関与によって、子ども・若者の地域における関係の広がり確認でき、孤立状態が改善されています。

「レーダーチャート」では、4つの領域と細分化した12領域で、支援の始まるの頃と、支援後の変化を表しています。このチャートの領域は、「子ども・若者の育ちと自立を支える活動調査」で、

調査協力団体が、子ども・若者についての課題として回答された、50以上の項目を類型化し作成しました。「生きるチカラの課題」「成長思考・自立課題」「健康・生活・環境の課題」「対人関係の課題」の4領域について、10事例、それぞれ、特性を持った変化がもたらされています。

また「つぶやき」については、支援者へのヒアリング時、子ども・若者自身からのつぶやきが紹介され、子ども・若者がエンパワーされている実態、また子ども・若者が抱える「生きづらさ」の改善を支援者自身が感じた時の安堵や喜びと捉えて取り上げました。

子ども・若者の課題の複合性や支援目標を検討し実践するために、支援団体の内部で、あるいは専門機関と協働で支援する場合など、ケースを共有するツールが必要になっているように思われます。住民の支援活動にも、公的な支援にも強み・弱みがあるとすれば、多様な領域に及ぶ子ども・若者の課題について、その力を活かしあい、地域の連携・協働関係によって改善する体制を、地域社会に構築していく必要を本事例集によって改めて確信し、次のステップにつなげたいと考えています。

「子ども自身の課題」「親や環境の問題」に住民として 向き合う支援の在り方

「マルトリートメント」という用語があります。日本では「大人の子どものための身体的・性的・心理的虐待とネグレクト」を包括的に指しています。

本事例集は、すべて地域の住民活動が対応するケースですが、こうした状態に長期的に置かれ、「他者を信頼できない」「他者との適切な関わり方ができない」「他者に暴言・暴力をふるう」などの影響が出始めているケースが散見されます。本来こうしたケースには、子どもはもちろん、家族に対しても何らかの保護・支援が不可欠ですが、ケースの発見さえ難しく、伴走的な支援が困難なのが実情ではないでしょうか。

本来、子ども・若者の育ちや自立を阻む要因については、「子ども自身にある」「親や環境にある」「子ども自身、親や環境、双方にある」等に分類し、適切な支援を行うことが求められます。

本事例集の活動団体の中には、子ども・若者に対する支援のみで、ケース8のひきこもりの若者への就労支援のように、家族に対する支援は行っていない団体もありますが、一方でケース1やケース5のように親と子どもを同時に、それぞれへのアプローチを考え、支援している団体もあります。更に

はケース4の外国にルーツを持つ子どもへの長期的な支援や、ケース6のように親子二代にわたる関係性があり、現在の支援はあくまでも、子どもを中心に置き、親との関係を徐々に深め、継続性を持ちながら支援しているものもあります。このことは、冒頭に示した、子ども・若者の課題、「生きづらさ」を掴んでいるからこそその必然というべき支援なのでしょう。

更に、住民主体の活動特性、あるいは強みとも思われますが、これらの活動による支援は、子どもや親への直接的な相談に限らず、「多様な体験の場の提供」や、「多様な地域の住民との関係性を築く下支え」をする中での改善を考える取り組みです。これらは、地域に暮らす住民同士である基本的な関係性を基に、子ども・若者・家族との信頼関係を築くことを第一に行われており、緩やかな経過をたどり子ども・若者のエンパワーが実現されていると観ています。

全事例を俯瞰してみると、子ども・若者、親、共に、地域や人に対する「安心」「信頼」の上にもたらされた効果であることに気がきます。

事例紹介にあたって、関連する制度政策、社会状況などを示していますが、世代を問わない「生きづらさ」が広がる社会において、専門職・専門機関の役割の重さも痛感する一方、公的制度政策の限界が顕在化しています。

人の「生きづらさ」を解決するというより、理解し、見守り、支え、生きる価値を感じ、歩んでいけるよう導いていくには、人との関係が希薄と言われる社会だからこそ、生活の場で、当事者・家族に寄り添う地域の伴走支援に期待と可能性があると考えます。

「子ども・若者の声を聴く」ことから発展するソーシャルワーク

取材を行って、支援者について共通に優れていると感じたことは、「子どもの声を聴く力」です。課題を抱える子どもや若者は、既に、声をあげにくい状態にあります。その子ども・若者、そして家族の声も、どうしたら聴くことができるのか、容易ではないことを理解する必要があると思います。このことに注力することは、子ども・若者の育ちと自立を支えるために、どんな活動を行うかということより重要であると確信しました。

前項で、支援者が子ども・若者との信頼関係を築くことが重要であることを繰り返し述べてきましたが、ここでは更に発展し、「子ども・若者自身を支援の場に参画させる」ための「子どもの声を聴く」ことの重要性を取り上げます。

課題を抱える子ども・若者自身が、自らの生活環境に関心を持ち、人や組織等との関係性を持つようになると、良好な形での協働がはじまり、環境（家庭・地域社会）にも変化をもたらすことにつながっています。

お気付きでしょうか。ケース7、ケース9、ケース10の事例では、将来に希望を持てなかった中学生女子が、地域でバ

ンドを結成してライブに向け活動を行ったり、発達障害の若者が地域の子どものためのプレーパークで活躍したりしています。リモート授業によって期待していた憧れの大学生活で広がるはずの人間関係が実現しなかった若者たちが、仲間を創って子ども食堂で活躍し、世代を超えた地域の人間関係を構築し、自分の人生の新たな方向性さえ見出しています。

これらの事例では、子ども・若者が自らの課題を克服しながら、地域社会の課題を解決する社会の一員に変わっています。支援者たちは、輝きを放つ子どもや若者に目を細めて喜びつつ、見守る姿勢は崩れません。更に声に耳を傾け続けます。

課題を抱える子ども・若者が支援者以外の多様な人とながり、社会とのつながりに発展し、自信、自己肯定感、自己有用感を高めながら、生きる喜びと、未来の可能性を信じられるようになります。これは、事例集に登場する子ども・若者・その家族に限らず、彼らと関わった人々にも及んでいます。

私たちは、こうした実態を観ることによって、もはや支援者を超えた「地域のチカラ」に圧倒され、こんな地域に暮らしたら、幸せだろうとまで思いました。まさに、個別の支援から地域の支援につながり、共に生きる小地域が形成される姿を観る取材となりました。

調査研究及び育ちと自立を支える活動普及啓発の継続

「地域 みんなが元気になる活動事例集」の制作は、調査研究活動の一環として取り組みました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響は、取材団体も受けており、公的機関が運営する貸室を会場としている居場所は休館となり、訪問による支援への切り替えなどによって対応していました。ひとり親世帯の母親が、非正規雇用で失業となり、経済状態がより悪化する家庭も増加しています。そうした一人ひとりに、世帯ごとに、隣人として、共に生きる姿勢で伴走し続けています。支援者も少なからず、個人的生活にも活動にもリスクが生じるなかで。

多くの市民が、専門職が、「どうしてそこまでやるの?」と思われるかもしれません。しかしながら、支援者の方々10名やその周辺の仲間の方々は、皆、明るく、元気です。子どもや若者・家族を慮り、大切にし、共に生きることに喜びを感じています。たくさんの共感する仲間もいます。困った人を支える支援ではなく、懸命に生きようとする子ども・若者・家族をエンパワーするスタンスです。

この気づきは、子ども・若者の育ちと自立に対する支援のあり方、また、そうした支援者の養成についても、小さな方向転換がもたらされたように感じています。

子どもの育ちを、若者の自立を、社会全体で応援できるよう、小さな一歩からでも歩みを進めましょう。

皆さんとの対話の輪が、実践の輪に発展していけるよう、私たちも引き続き取り組みを続けます。

変化する人々のライフスタイルや生活ニーズに対応するためには、過去の社会のメインストリーム（主流の考え方）から、オルタナティブ（代案、主流の方法に代わるもの）重視への移行が求められ、多様な人や組織による試行錯誤や、様々な代替案をつなぎ合わせるプロセスが必要になっていました。新型コロナ感染症拡大は、このような社会の動きに拍車をかけることになったのではないのでしょうか。

本事例集で紹介した「生きづらさ」を抱える、子ども・若者をエンパワーする地域の支援者の皆さんは、まさに、そうした現代社会が求める社会活動の最前線にいる方々だと思います。

問題解決のための制度政策や専門機関・専門職によって形成される言わば「外側からの公共」に対し、小さな地域や場所、人々から生まれる「内側からの公共」の形成を、様々な困難の渦に翻弄されながら、仲間との共感や子ども・若者の笑顔を励みに取り組みます。どの支援者も「自分で考え行動しています」。「社会的地位や職責に縛られることなくクリエイティブな共創につながるパートナーシップにこだわります」。更に、「地域における体験・経験の共有を惜しむことはありません」。

時代が求める、あるべき社会的活動を見せて頂きました。『身近な暮らしのなかで、一人ひとりが「しあわせ」と感じ、共に生きる社会』を、目指す社会像とする、よこはま地域福祉研究センターにとって、これらの出会いは大きな糧となりました。すべてのご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げます。

センター長 佐塚 玲子

地域での子ども・若者の居場所の調査や取材を通して、地域の支援者が子どもたちの不安や困りごと、家族の問題にいち早く気づき、それぞれの方法で子どもに寄り添い、きめ細やかな支援をしていることがわかり、「これを何とか可視化したい」と思い、この事例集の企画に臨みました。

地域の活動は様々です。制度やサービスにとらわれず、子どもにとって必要なことを、また、自分たちにできること、自分たちだからできることを、仲間やネットワークを広げ、試行錯誤しながら行なっています。活動の中には様々な葛藤がおこります。誰もがこの事例のような支援ができるわけではないかもしれません。

取材の中、ある支援者は語りました。「私のように活動するのは一握り。でも私の背中を見て、それを応援してくれる地域の方や少しなら手伝えるという仲間がいる。そんな人たちが増えていくことが地域の子どもの見守る力になっていく。だから今できることをやる。目の前の子どもたちを放ってはおけないから」事例集発行にあたり出会ったすべての方々に感謝です。

沼 佐代子

よこはま地域福祉研究センターの職員となって、初めて携わる事例集制作でした。

取材を通し、子ども・若者が、地域の方々の寄り添いによって、生きる力を回復していく、あるいは、新たに獲得し、顔を上げ、前を向いて瑞々しく伸びていこうとする姿に何度も感銘を受けました。

事例中の支援者の愛情と熱量に、取材者である私自身も圧倒されました。それだけに、本紙を読まれる地域の活動団体には、ここまでできるだろうか？ここまで求められているのだろうか？と、プレッシャーを感じる方もいるかも知れません。

しかし、子どもの心に、真摯に寄り添い支えることで、このような変化の可能性があるというのが一番お伝えしたいことです。地域には今なお、孤立している子ども・若者がたくさんいます。この事例集をご覧いただき、それぞれの活動を参考にしつつ、みんなが、少しずつ繋がりを増やして、出来ることを考え始めるきっかけになれば、これ程嬉しいことはありません。

酒井 智子

地域 みんなが元気になる活動事例集 2021

コロナに負けない 育てよう 子ども・若者

企画・取材・編集

特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター

副理事・センター長 佐塚 玲子

子どもと家族の地域生活支援プロジェクト担当職員 沼 佐代子・酒井 智子

ご協力いただいた団体

NPO 法人アイゼン／開成子どもゆめパーク／こども食堂プロジェクト@やまと／

NPO 法人ワーカーズコレクティブ チャイルドケア／就労支援センター働楽／

大島学習教室／ずし子ども0円食堂／日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）

連合会 センター事業団／認定 NPO 法人横浜メンタルサービスネットワーク／

多摩区ソーシャルデザインセンター／遊 Being♡あしがら 他

アドバイザー・コアメンバー

臨床ソーシャルワーク研究所（CSWRI） 衣笠一茂

岡野 富茂子・草柳 ゆきゑ・鈴木 弘美・富江 里栄・永井 圭子・鳴海 美和子・

服部 誠・早川 仁美・山崎 由恵・吉田 恵一 他

デザイン・DTP

特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター 塚原 祥子

発行日 2021 年 9 月

発行者 特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター

〒231-0013 横浜市中区住吉町 2-17 金井ビル 201

電話 045 (228) 9117 FAX 045 (228) 9118

HP <http://yresearch-center.jp/>



この冊子は、一般財団法人日本民間公益活動連携機構（JANPIA）が実施する休眠預金等活用法に基づき、資金分配団体である特定非営利活動法人神奈川子ども未来ファンドの「子ども・若者支援事業新型コロナ対応助成」を受けて作成されました。

地 域 の み ん な が 元 気 に な る
活 動 事 例 集

2021

コロナに負けない 育てよう 子ども・若者